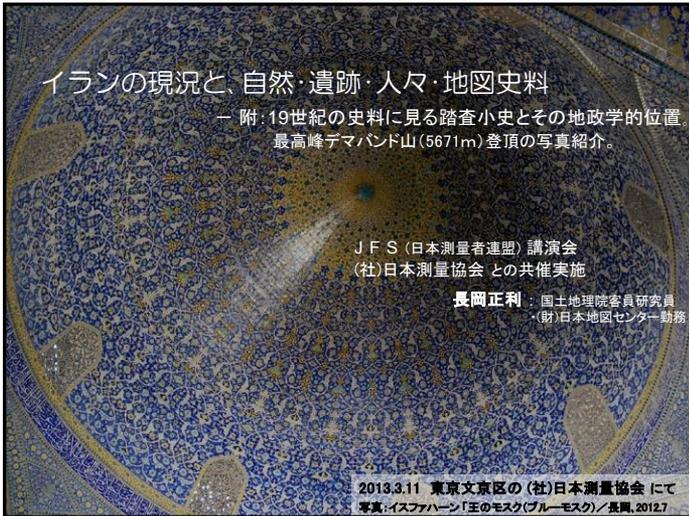
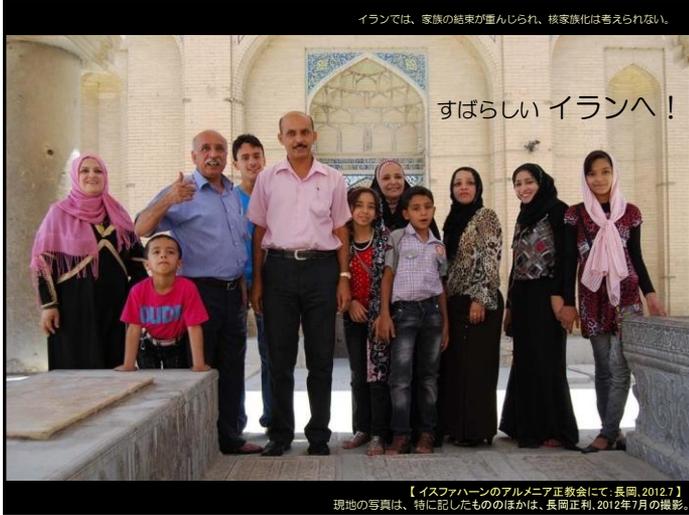


「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



【本日のお話し:内容】

イラン(かつてのペルシア)について:

- ① イランの 地理・歴史概説 - 予備知識として
- ② その現況:人々の日常・街の様子 - 米国の経済制裁下における
- ③ イラン(ペルシア)の遺跡紹介
- ④ 19世紀~20世紀初頭におけるペルシアと周辺諸国の踏査記録
— 中央アジアの覇権を巡って英露がしのぎ削っていた時代の、S.ヘディンらによる報告書に見る当時の状況。
- ⑤ 最高峰デマバンド山(Mt.Damavand、公称5671m;または5610m)登頂
附:イランの工芸品など各種と、国立博物館展示

スライド中では、現地の写真紹介がしばらく続くこともありますが、そのために、時折は、お話しが中断します。

写真: 藍乾のイラン高原空撮/長岡,2012.7



紹介する写真: 写真は、特に出典を記したもののほかは、長岡正利・2012年7月の撮影。
(ひょっとして、記載漏れがあるかも知れませんが。)

イランの現況:人々と街のようす
入国から、テヘラン、シラズ、イスファハーン

イラン各地の遺跡
シラズ近郊のベルセポリス(アケメネス朝の祭祀都市:前6~前4世紀)
イスファハーン「王の広場」とその各種建物、市場など
同市内(ハージュ橋など)アルメニア正教会など。併せて、シラズのサーディ・ハーフス墓)も。
アケメネス朝発祥(前6世紀)のハサルガダゴ遺跡とキロス王墓など
ササン朝(3~7世紀)のナグシェ・ロスタム遺跡など
アラムート城址:暗殺教団「ハサハーフ」の城塞で、13世紀モンゴル軍により壊滅

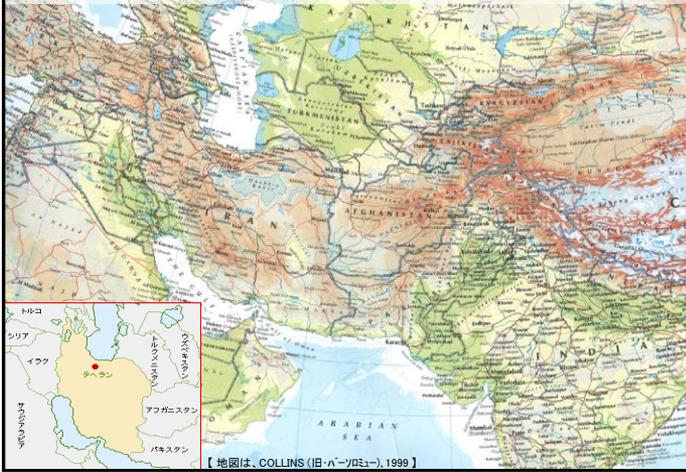
附:最高峰、デマバンド山の自然と登山
イランの工芸品など各種 / ほかに、国立博物館展示

ご紹介スライドは、全部で600枚ほどになります。

(夏のデマバンド山上火口原。)

「イランの現況と、自然・遺跡・人々」地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

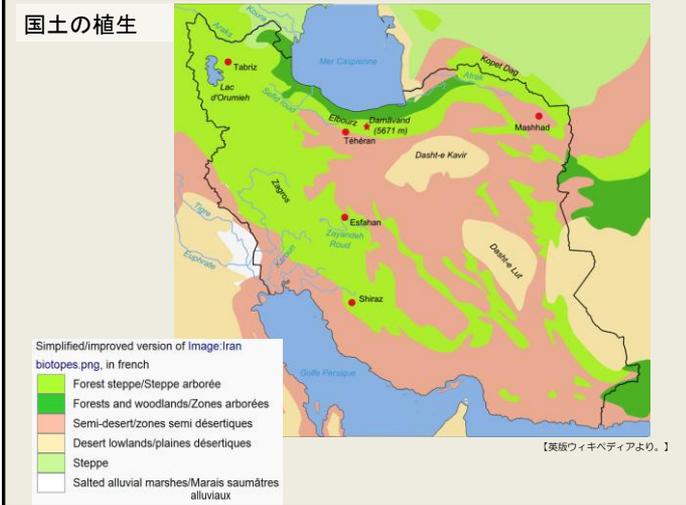
① ペルシア/イランの地理・歴史概説 — 予備知識として



その地質的位置



国土の植生

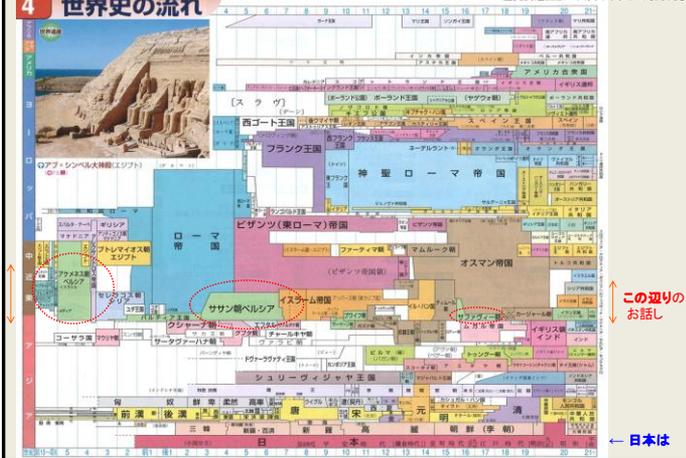


イランの概要と歴史 — 日本国外務省HPより概略抽出

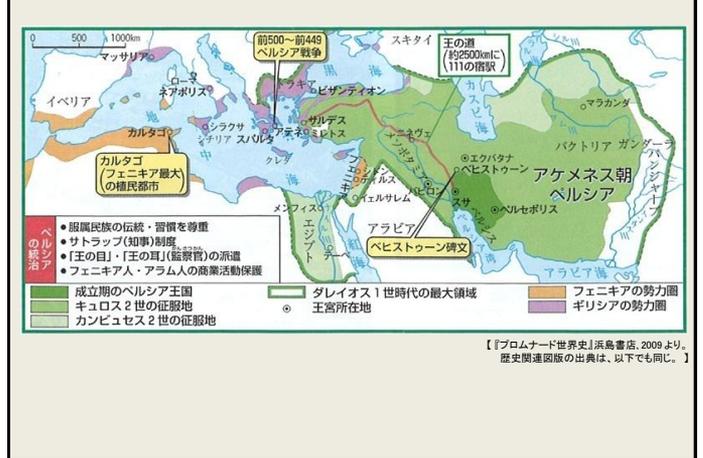
面積: 164万km² (日本の約4.4倍)
人口: 7,473万人 (2010年、イラン政府発表)
首都: テヘラン
民族: ペルシヤ人 (他にアゼリ系トルコ人、クルド人、アラブ人等)
言語: ペルシヤ語、トルコ語、クルド語等
宗教: イスラム教 (主にシーア派)。ほかにキリスト教、ユダヤ教、ゾロアスター教など
歴史:
 ・アケネス朝ペルシヤ (前5世紀)、ササン朝ペルシヤ (紀元3世紀) 時代には大版図を築く。
 ・その後、アラブ、モンゴル、トルコ等の異民族支配を受けつつもペルシヤ人としてのアイデンティティーを保持する。
 ・1925年にパフラヴィ (パーレビ) 朝が成立。
 ・1979年、ホメイニ師の指導のもと成就したイスラム革命により現体制となる。
 ・イラン・イラク紛争 (1980年~1988年) 及びホメイニ師逝去 (1989年6月) 後、
 ・1989年にハメネイ大統領が最高指導者に選出され、ラフサンジャニ政権 (2期8年)、
 ハタミ政権 (2期8年) を経て、2005年8月にアフマディネジャード政権が発足。
 ・2009年6月、第10期大統領選挙が実施され、アフマディネジャード大統領が再選。
 (注: 1979年11月には米大使館人質事件。1981年1月に人質が444日ぶりに解放。) この間、1980年4月には、米軍の救出作戦の失敗など。

イランと周辺諸国の歴史概観 場所

【『フロムナード世界史』浜島書店, 2009より。歴史関連図版の出典は、以下でも同じ。】



アケメネス朝の最大版図 (前6世紀)



「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

アケメネス朝崩壊への序章 **イッソスの戦い** (前333年)





【A. Altobelli, The Battle of Alexander at Issus - 英版ウィキペディアより】

戦いに圧倒したマケドニア王アレクサンダーは、東征を続け、インダス河に達する。

【ボンベイ遺跡の壁画: 英版ウィキペディアより。】

アレクサンダー大王の遠征経路とそのアレクサンドロス帝国の最大版図



【英版ウィキペディアより。】

遠征帰路でのアレクサンダーの死後、帝国は分裂して、この一帯はセレウコス朝シリアに。一方では、ローマ帝国の勃興と繁栄。

5世紀の世界と、ササン朝の最大版図



古代において、ペルシアの文化が開くのは、主として、**アケメネス朝とササン朝**

ササン朝(3世紀初頭~7世紀)の文化は、後の**イスラム**に多大な影響を与え、**日本**にも渡って、**正倉院**に。



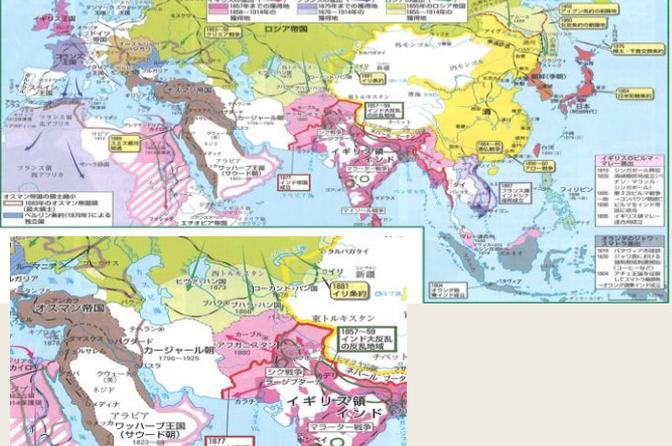
【正倉院御物「白瑠璃椀」: そのHPより】



【イラン国立博物館で長岡撮影, 2012.7】



19世紀後半、ヨーロッパ諸国のアジア進出

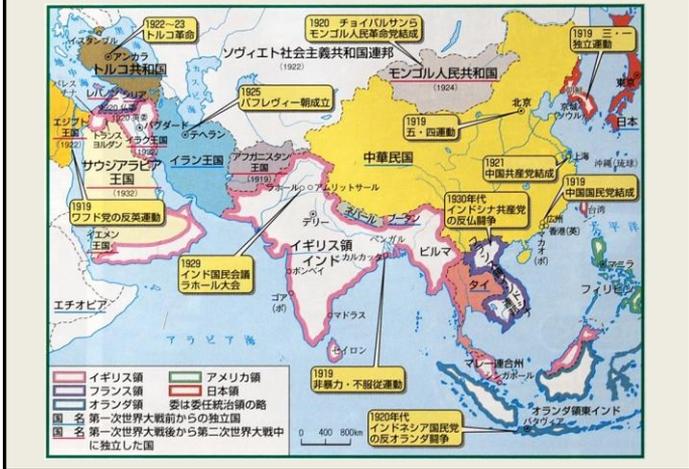


19世紀末~20世紀初、帝国主義時代の世界



「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

ご参考: 第一次世界大戦後のアジア



ご参考: 第二次世界大戦後のアジア



現在の、第3代大統領、アフマディネジャドと第2代最高指導者(アヤトラ)、アリー・ハメネイ。

人物画像は、末尾(後出のヘッダの事件より)を除いて、いずれも英版ウィキペディアより。

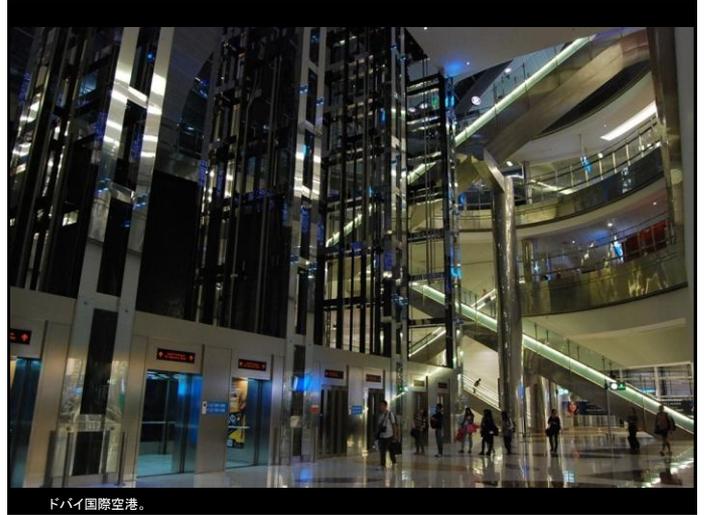
初代最高指導者、ルーホッラ・ホメイニー パーレ朝第2代皇帝(シャー)、モハンマドレザー・パーレヴィ ガザール朝皇帝、ナスール・エッディン



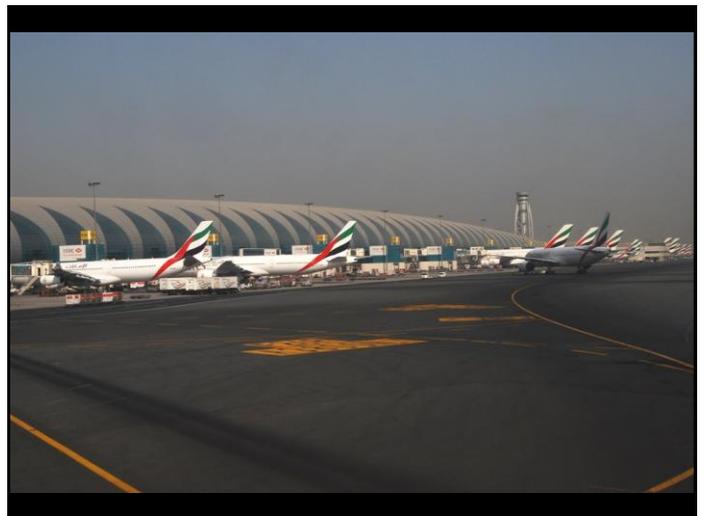
② イランの現況：まずドバイ経由でテヘランへ



(米国による経済制裁の影響で、日本からのイラン航空直行便は停止されてしまったため。後述。)



ドバイ国際空港。





ドバイ国際空港を発ち、ペルシア湾を越えてテヘランへ向かう。



ペルシア湾を渡って、間もなくイラン上空へ。



延々と続く、沙漠上空の酷乾の世界。



テヘランに近づくと、灌漑農耕地が。



テヘラン国際空港 着。



ここで、エミレーツ航空(アラブ首長国連邦)のお嬢さんとお別れ。

これはドバイ~テヘラン便で
前スライドが 成田~ドバイ便。
その服装と化粧の違いにご注意を



テヘラン国際空港 到着フロア。

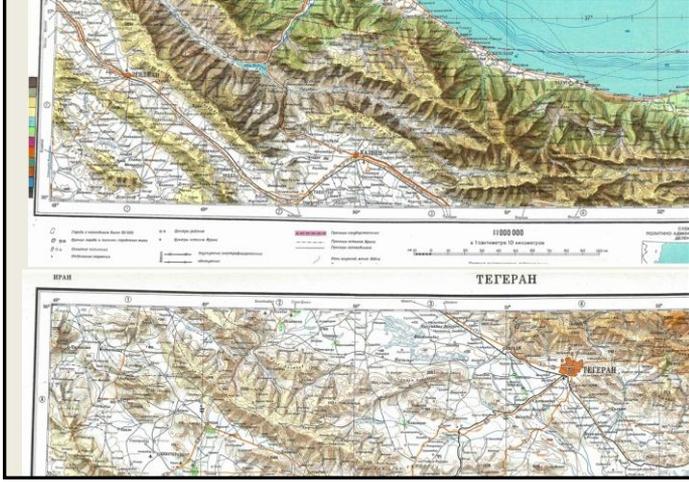


テヘラン国際空港 入口の前。

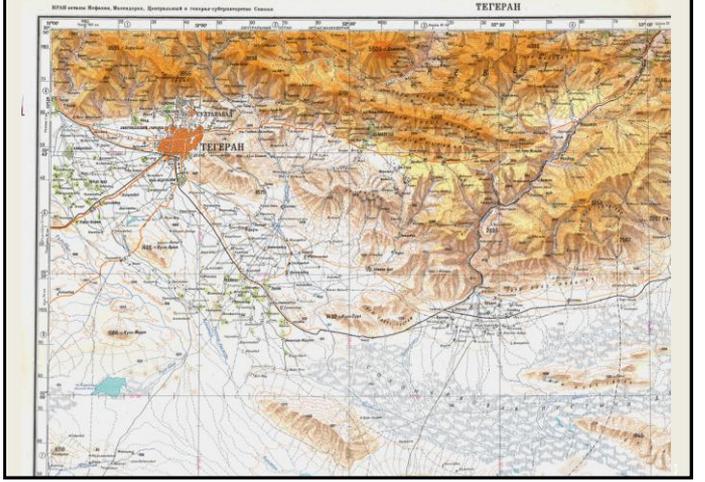
「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



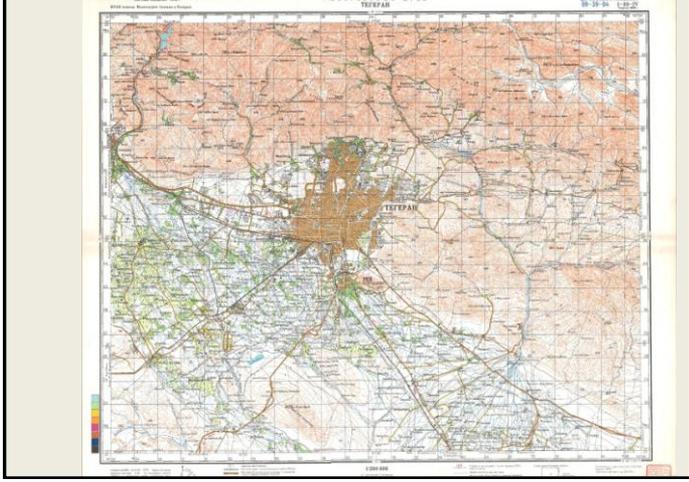
② - O 附1 地図で見るイラン: ソ連邦地形図 100万分1図 (その4分割の左下と、隣図の左上部分)



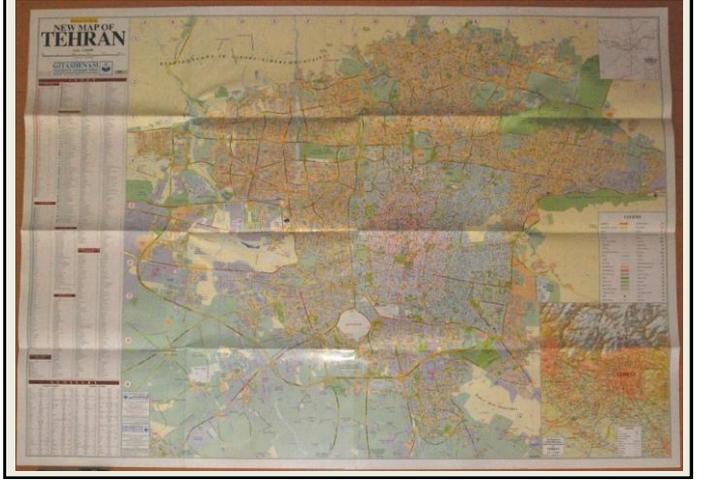
ソ連邦地形図 50万分1図 (その4分割の左上部分)



ソ連邦地形図 20万分1図 (10万図より編集調製。更に、前紹介の小縮尺図も。)



② - O 附2 地図で見るイラン: テヘランなどで普通に買える地図 次ページに部分拡大



ご参考: ペルシア語版ウィキペディアで、「イランと日本の関係」を

イランの米大使館人質事件

素肌をさらす女性には、はしたない。

オバマ夫人は半袖ドレス?

Iran Japan

イランの米大使館人質事件

素肌をさらす女性には、はしたない。

オバマ夫人は半袖ドレス?

Iran Japan

ご参考: マスコミに見る、心憎い配慮も

素肌をさらす女性には、はしたない。

オバマ夫人は半袖ドレス?

Iran Japan

イランの米大使館人質事件

素肌をさらす女性には、はしたない。

オバマ夫人は半袖ドレス?

Iran Japan

ご参考: 日本での、映画「アルゴ」の報道の一例

＜イラン＞「アルゴ」アカデミー賞に反発 漸くCIA称賛に

【アルマトイ (カザフスタン南部) 特派員】第85回アカデミー賞で、在イラン米大使館占拠人質事件(79年)を題材にしたペー・アフレック監督の映画「アルゴ」が作品賞など3冠に輝いたことについて、イランメディアが一斉に反発している。

CIA(中央情報局)関係者が映画製作クルーを誘ってイランに入国し、事件に巻き込まれた米外交官を救出するストーリー。イランメディアは、事件に關与したイラン人学生や市民が暴力的に描かれる一方、米外交官やCIAが英雄的に描かれ、「まったく事実に反する」と批判している。

半国営メデア通信は25日、オバマ米大統領の妻ミシェルさんが受賞式に参加したことに触れ、「芸術的な評価ではなく、政治的な賞だ」と指摘。イラン学生通信は、「賞の長い歴史と名譽に背をつけた」と非難した。また、イラン国営放送は「西側諸国での反イラン感情をあり、軍事衝突の下地を作るものだ」と述べた。

【関連記事】
 <「アルゴ」の題材> 在イラン米大使館占拠人質事件とは
 <写真特集> 第85回アカデミー賞 華やかなスターたち
 <資源とテロ> アルジェリア人質事件の実態と背景(その1) 現地実績40年「想定を超える事態」
 <資源とテロ> アルジェリア人質事件の実態と背景(その2止) 利益を奪う多国籍企業
 <拡散するイスラム武装勢力> 「アラブの春」あだ花が、対テロ戦争「第2幕」へ

毎日新聞

映画「アルゴ」3.13ブルーレイ&DVDセット

HOLLYWOOD

第85回アカデミー賞 3部門受賞!!
 作品賞・脚色賞・編集賞

第67回ゴールデン・グローブ賞 2部門受賞!
 作品賞(ドラマ部門) 監督賞(ドラマ部門)

CIA史上、最もありえない救出作戦
 それは「二七映画」作戦だった。

18年間封印されてきた実話。

アカデミー賞受賞! 緊急上映!!

3.13 フルレーイ&DVDセットリリース
 レンタル/オンライン配信も同時開始

http://www.warnerbros.co.jp/argo/

ご参考: イランと米国の関係: ウィキペディア「アメリカ合衆国とイランの関係」より、その抄録

第2次世界大戦までのイランと合衆国との関係はきわめて親密なものであった。結果として立憲派の多くが、イランに対する恩恵的な英露の干渉・支配を打ち破る闘いにおける「第三勢力」として合衆国を評価した。こうした信頼は第二議会以降、3次にわたってアメリカ人を「イラン総財務官」として任用したことにあらわれている。同ポストはアーサー・ミルスボーン、モルガン・ジャスター、エルギン・グロースクロースによって担われた。これらの指名は、公文書としては存在していないが、合衆国政府と立憲派による接触の成果と考えられる^[1]。さらに、イラン経済の近代化と英露の影響からの自立において、合衆国の企業家らの全面的支援を受けたことは確実である^[1]。

1979年のイラン・イスラーム革命以前、イランはペルシア湾岸における重要な親米国家であり、イランは合衆国における最大の留学生数を持つ国の1つであった。

1979年イスラーム革命 [編集]

1979年、イラン・イスラーム革命が勃発。シーアは再度の亡命を余儀なくされた。新たに指導者となったアーヤトollah・ホメイニーは直後から合衆国を「大悪魔」、「不信仰者の国」と痛罵した。

合衆国のジミー・カーター政権はシーアに対するこれ以上の支援供与を拒否し、シーアの政権復帰に関心を持たないことを表明した。しかし当時総を患っていたシーアが治療のため合衆国入国を申請すると困惑し、最終的にカーターは不承認、入国を認めない。結局、このことはシーアが合衆国の傀儡であったというイラン人の印象を強める結果に終わった。

イスラーム革命時に、革命政権がアメリカ政府に対して、革命政権の承認、モサッダ政権の打倒と傀儡のバフラーヴィ政権の樹立、バフラーヴィ政権時代の不平等な関係を平等互恵の関係に変更し、バフラーヴィが私物化した財産をイランに返還し、バフラーヴィ元皇帝の身柄をイランに引き渡すことを要求したが、カーター大統領はその要求を拒否して、イランの在米資産を接収した。革命運動の一部の勢力はアメリカ政府の姿勢に対する反発で、1979年11月にアメリカ大使館を占拠し大使館員を人質にして、アメリカ政府に対する要求を継続した。カーター大統領はアメリカ大使館占拠事件に対して、1980年4月にイランに対する国交断絶と経済制裁を実施した^[6]。

1979年イランアメリカ大使館人質事件 [編集]

詳細は「イランアメリカ大使館人質事件」を参照

1979年11月4日、イマーム戦列支持ムスリム学生団が、アーヤトollah・ホメイニーの支持のもとテヘランのアメリカ大使館を占拠した。これは大使館によるスパイ行為のためであった。52人のアメリカ人が444日間にわたって人質となった。1980年4月7日、合衆国はイランとの国交を断絶。1981年4月24日以降、スイス政府がテヘランの利益代表部を通じて合衆国の権益を代行した。一方、合衆国におけるイランの権益は、ワシントンD.C.のパキスタン大使館内に設けられたイラン利益代表部によって代行されることになった。

1981年1月19日のアルジェ合意により、オランダ・ハーグにイラン・合衆国損害裁定委員会が、合衆国とイラン相互の主張を処理するために設置された。ただしハーグを通じての合衆国とイランの接触は、法的問題に限定された。衆約調印の1981年1月20日、人質は解放された。

「在合衆国イラン・イスラーム共和国利益代表部」も参照

在合衆国イラン・イスラーム共和国利益代表部の写真

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料」附：19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

ブレイング・マンティス作戦 [編集]

1988年4月にアメリカ合衆国とイランは直接交戦している。イランが行ったペルシア湾への機雷敷設に対し、アメリカ海軍が報復として攻撃を行ったものである。作戦名はブレイング・マンティス作戦。4月14日に作戦は行われ、イランのフリゲートが撃沈された。なお、交戦は1日で終了した。

1988年: イラン航空655便撃墜事件 [編集]

詳細は「イラン航空655便撃墜事件」を参照

1988年7月3日、合衆国の巡洋艦ヴァンセンスがイラン航空のエアバスA300B2を撃墜するという事件が発生。ホルモズ海峡を越えたイラン領空内でのスケジュールにある民間航空機の撃墜であり、子供66人を含む6カ国あわせて290人の一般人が死亡した。1996年2月22日、合衆国は撃墜によるイラン人犠牲者248人に対する補償6180万ドルの支払いに同意した。ただし3000万ドル以上と見積もられる航空機自体の補償は現在に至るまでなされていない。

イランの核開発計画に関わる要因 [編集]

2003年以来、合衆国はイランが核兵器開発を計画している」と主張。これに対し、イランは核開発計画は発電のみを目的にしていると反論している。



2005年6月、合衆国國務長官コンドリーザ・ライスはIAEA事務局長モハメド・エルバラダイについて、イランに対する姿勢をより強固にせねば、3期目の選出はないだろう」と述べている^[20]。合衆国とイランはともに核拡散防止条約(NPT)関係国である。2005年5月の1か月にわたる会議上、IAEAは核燃料およびその処理について報告が不十分であるとして、イランがNPT保障措置管理に違反している」と発表している^[21]。これに対し、NPT第4条では、非核兵器保有国に対して非軍事的原子力エネルギー開発の権利を認めており^[22]、さらに合衆国および他の公認の核兵器保有国は第6条違反であるとする反発があった。第6条は核軍縮を定める規定であるが、2006年現在で核兵器保有国がそれを行っていないとするものである。

2003年から2006年初にかけて合衆国とイランの関係は逐次緊張を増した。この時期、IAEAによる核関連施設への査察が継続しており、これはイランが自発的に加盟したNPT追加条項に基づくものである。

2006年3月8日、合衆国およびEU3カ国代表は、イランが未濃縮六フッ化ウランの保有を指摘、十分な濃縮が行われれば最大10個の原子爆弾製造が可能であり、これは「安全保障理事会が行動すべき時」と声明を発表した^[23]。ただし未濃縮ウランは、加圧水型原子炉のプーシェル原子力発電所では使用できず、また濃縮がなければ原子爆弾にも使用できない。

2006年対イラン制裁 [編集]

詳細は「イランをめぐる国際的危機」を参照

合衆国はイランの核開発、およびイラン政府によるイラクにおけるシーア派民兵に対する後方支援および財政的支援を問題として、国際的制裁を呼びかけた。後者についてイラン政府はこれを否定している^[24]。合衆国政府は2006年9月8日、合衆国金融機関関連の銀行を除いて、間接的取引を含めたイラン銀行との取引を禁ずる制裁を発動した。財務次官スチュアート・リービーの発表によれば、主要イラン国所有銀行として、サードラート・イラン銀行がヒズブッラーを含むテロ集団に対する資金移転を行った疑いがあるとされたためである。この時点ではイラン金融機関は合衆国の金融市場での直接の取引は禁止されたが、第三国を通じての取引は可能であった。その後サードラート・イラン銀行による取引は第三国経由でも凍結されているが、リービーによればイランのその他の銀行に対しては適用されないとされている。右の制裁はイランおよびヒズブッラーに対するプッシュ政権の新たな努力であり、リービーは2001年以降、ヒズブッラー支配下の組織にサードラート・イラン銀行を通じて、イランから直接に5000万ドル以上が流入しているとする。その上で、合衆国政府はイランとの取引を行わないようヨーロッパ諸銀行および金融機関を説得したいとしている^[25]。

「国際連合安全保障理事会決議1737」も参照

核開発問題 [編集]

詳細は「イランの核開発問題」を参照

イランの核開発については、イラン政府は常に、イランの核開発は平和利用の原子力発電のためであり、軍事的核兵器を開発する意思は無いと主張している。しかし、国連安全保障常任理事国であるアメリカ、ロシア、中国、イギリス、フランスの5か国の政府とドイツ政府は、イラン政府の主張は本音・真実ではなく、軍事的核兵器の開発のための偽装であるとの疑いを持ち、国連安保理は2006年12月、2007年3月、2008年3月にイランを制裁する決議を採択した。しかし、イラン政府は国連安保理の制裁決議は受け入れないと表明し、イランの平和利用目的の核開発は誰にも妨害させない、誰も妨害できないと主張している^{[26][27]}。アメリカの国家情報会議(NIC National Intelligence Council)は、イランは2003年に核兵器の開発を中止している、アメリカ政府が主張するイランの核兵器開発疑惑は事実ではない」と政府に報告した^[28]。

核エネルギー開発に関する非欧米の見方 [編集]

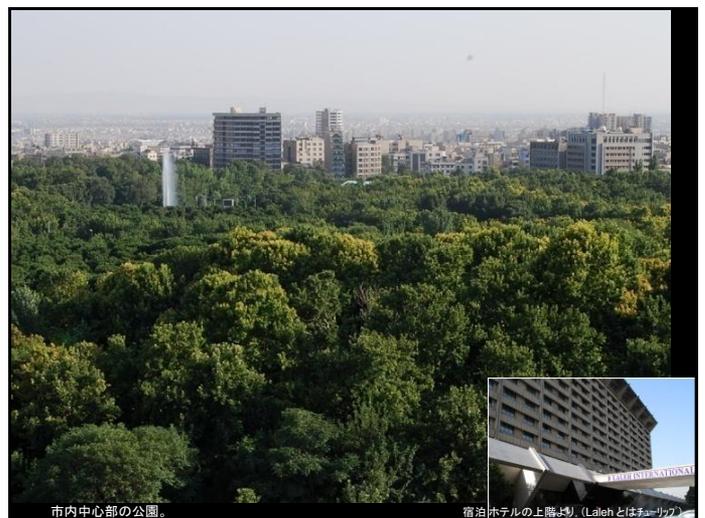
欧米がこの問題や、その他の事柄でイランを極度に危険視してあげるのは、イランが欧米に依存しない、イスラムという価値観に基づく体制だからである、という見方がイランではある^[29](下記の「イランの主張」参照)。一方、日本ではイランが危険な国であるかのような論議があるが、アフマドネジャド大統領は一貫して核兵器を持つつもりは無いとし、「核爆弾は持つてはならないものだ」とアメリカのメディアに対してはっきりと言い切っている(Newsweek誌2009年10月7日号)。その上で、アメリカの学生と大統領自身がニューヨークで交流するなど欧米に対して対話する努力を積極的に払い、アジア、南米、ヨーロッパなど様々な国のトップなどと交流し、国内でも女性の関係指名(女性の権利の向上)などの画期的な改革を行うなど、様々な努力を行っている。また、イランは中国とも同盟を結んでいる。そのため、イランに理解を示す国々には日本ではあまり知られていないが数多くあり、イランが危険だから核エネルギー開発も阻止しなければならないという論議は決して世界共通とはいえず、トルコ、ブラジル、ベネズエラ、キューバ、エジプト、その他の非同盟諸国もイランの平和的核エネルギー開発を支持している。2009年10月にトルコのエルドアン首相はイランを訪れ、アフマドネジャド大統領と会談した際に「核エネルギーの開発はイランの権利である」というイランの立場を理解を示し、当然であるとの姿勢を示した^[30]。また、非同盟諸国は2006年9月の首脳会議でイランによる平和利用目的の核開発の権利を確認する宣言等を採択した^[31]。

対イラン制裁(2010年) [編集]

2010年2月16日、クリントン米國務長官は中東歴訪を終え帰国した。国連安保理による対イラン制裁の強化に向け、湾岸諸国の協力を取り付けるのが狙いとみられていた。カタールでは「イランは軍事独裁に向かっている」と発言、サウジアラビアなどでも同じような発言を繰り返した。オバマ政権は、政権発足以来対イラン外交の強化を方針としてきたが、一転して制裁などの強硬姿勢を前面に押し出している。^[56]

2010年7月1日、オバマ政権はイランの金融・エネルギー部門と取引する企業への制裁強化を柱とする対イラン制裁法案に署名、同法は成立した。イランにガソリンを輸出する企業や、核開発にも関与する革命防衛隊と取引する金融機関への制裁を盛り込んでおり、米国の対イラン独自制裁としては史上最も厳しい内容である^[57]。







Lale Hotel から少し先へ行った交差点。



市内では、バス交通が発達。



以下は、市内中心部の公園にて。緑と水が豊か。



上は、公園で出逢った猫。
下は、ペルシア語版ウィキペディアより、ペルシア猫。





水辺はいつも、伝統的に、人々の憩いの場所。



カラテ(極真館)が盛ん。



バドミントンも盛ん。ほかに、ローラースケートなども。



テヘラン市内での、繁華街などではない、ごく普通の市街地の交差点。



スーパーマーケットには、商品(食糧品)が豊富に。



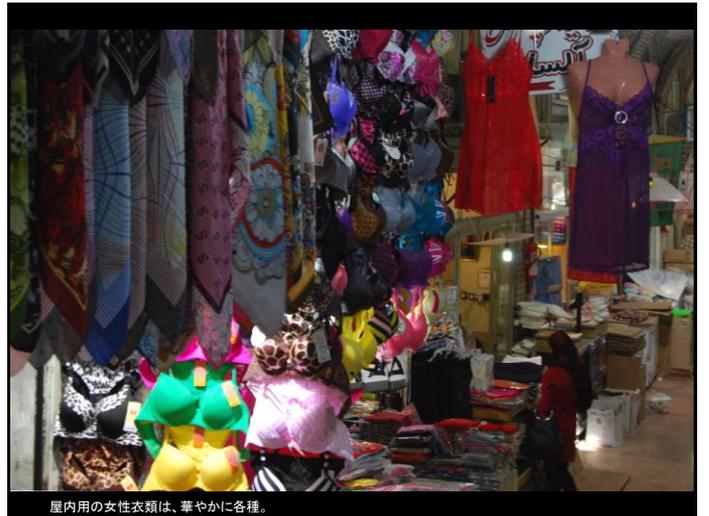
テヘラン市内、普通の通りにて。2階は住宅。



街路に面した商店。



大賑わいの、伝統的なバザール入口。



屋内用の女性衣類は、華やかに各種。





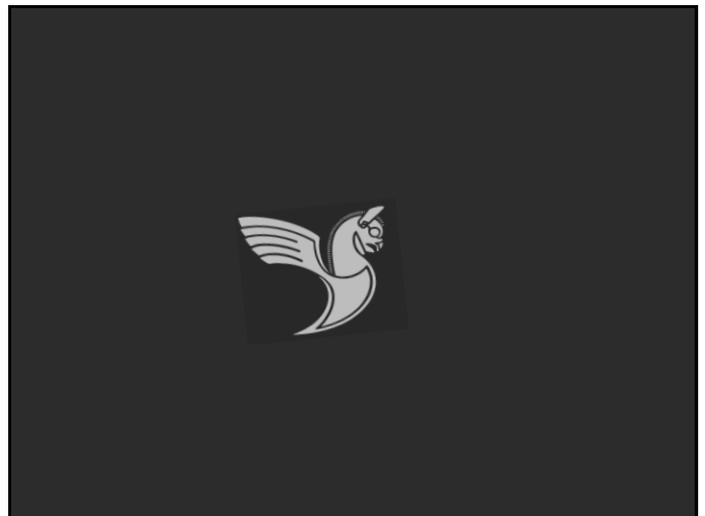
市内での、昼の普段の状況。(バスの窓から。)



平日夕方、郊外から市内への幹線道路の状況。



通勤列車は数分ごとに、どの列車も総二階車輻。



② -2 イсфаハーンの市内にて



以下の数枚は、ザーヤンデ河にかかるスィー・オ・セ橋(33アーチ橋)と、その東(上流)2km上流のハージュ橋にて。



スィー・オ・セ橋、下流(東)側。



夏のザーヤンデ河は、完全な渇水状態だが、
春の融雪増水期には、満々と水をたたえる。

ともに、スィー・オ・セ橋の上流(西)側。



(春の融雪増水期・ウィキペディアより。)



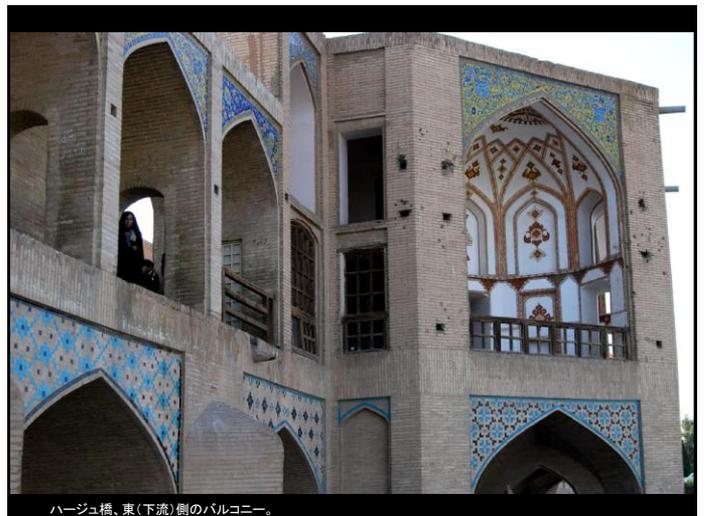
スィー・オ・セ橋上の、通路の朝。



ハージュ橋の上流(西)側(左写真:前から)と、
下流側(右:北から写す)。下部構造に着目。



橋の北つめには、有名なライオン像が。
これに跨がれば恋がかう。(結婚できる。)



ハージュ橋、東(下流)側のバルコニー。



そのバルコニーの左にて。



ハージュ橋下にて、夕涼みの人達。





スィー・オー・セ橋の北 (kowsal International Hotel の対岸) にある、ショッピングモール内にて。





スィー・オセ橋北つめて、朝。



イスファハーン市内の公園にて、朝のくつろぎ。



イスファハーン市内の日中。





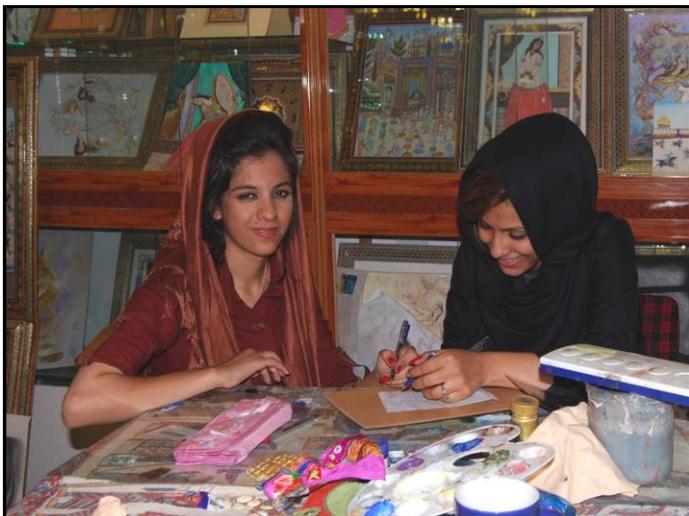
イスファハーン「王の広場」を囲む廻廊一階に設けられている市場(伝統的なバザール)にて。

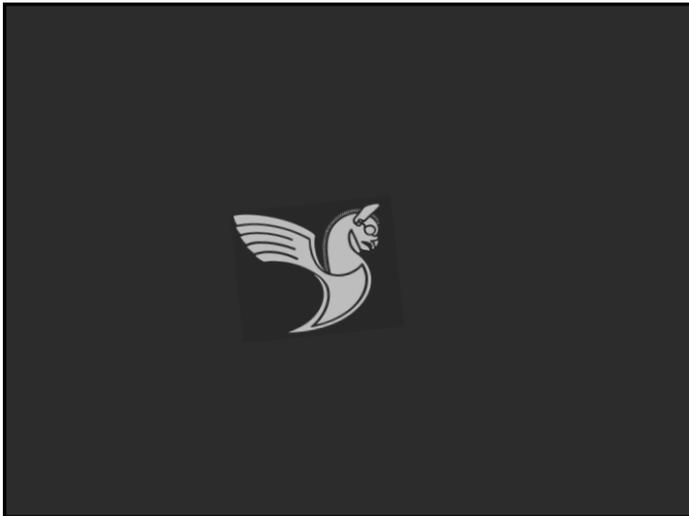


チャードル姿とは裏腹に、原色の布地・衣類が。



イスファハーン「王の広場」。夏の涼しい夕暮れともなれば、大勢の人々が。





ホテル上階から見た周辺の景観。シラースは乾燥地帯の中の巨大なオアシス。



市内中心部のキャリム・ハーン城塞と、その広場。







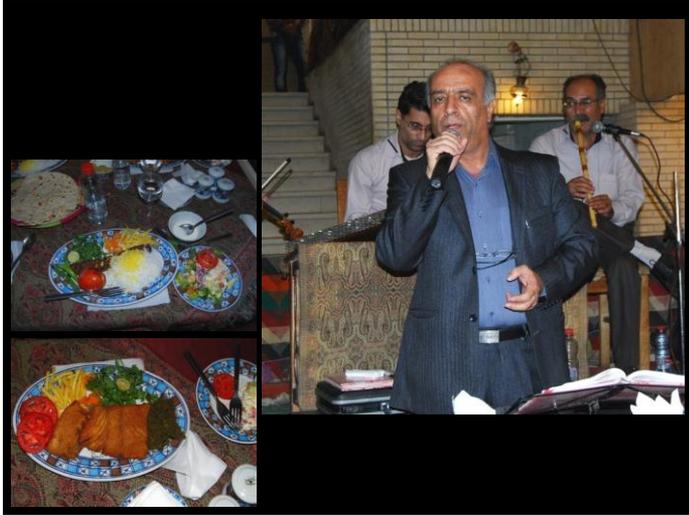


広場があれば、ローラースケートが盛ん。



市内の公園には、様々な遊具も。





レストランの壁面装飾。



陽が落ちて涼しい夕暮れ、キヤリム・ハーン城塞前広場でくつろぐ人々。



「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



延々と、酷暑・酷乾の大地を。



郊外の有様:パサルガダエで
アケメネス朝の遺跡を見た後、
炎熱の沙漠を、更に、イスファハーンへ向けて。



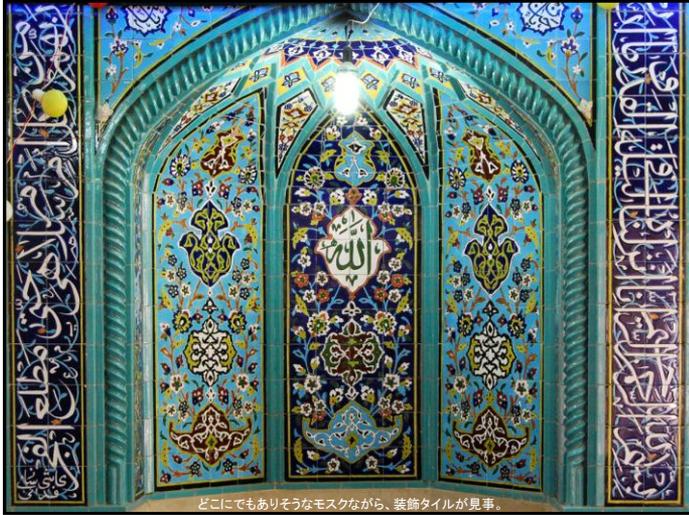
水が得られる地では農耕も。麦の刈りあとと、羊。



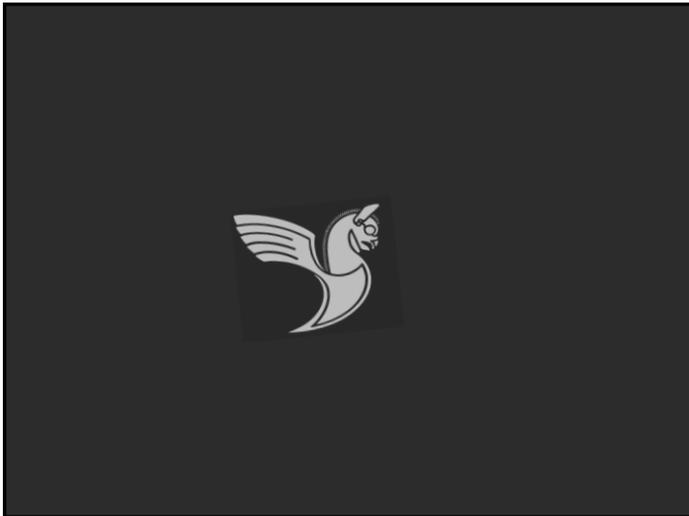
途中のオアシスにあった小さなモスク。



小さくとも、中は綺麗な装飾。



どこにでもありそうなモスクながら、装飾タイルが見事。



③ その遺跡紹介

1. シラーズ近郊のペルセポリス(アケメネス朝の祭祀都市:前6~前4世紀)
2. イсфаハーン「王の広場」とその各種建物
同市内のハジ・イブラヒム墓など、サデー・ハーフェス墓
3. アケメネス朝発祥(前6世紀)のバサルガダエ遺跡とキュロス王墓など
4. ササン朝(3~7世紀)のナグシェ・ロスタム遺跡など
5. アラムート城址:ハッサン・サッパーフの城塞で、13世紀のモンゴル軍によって破壊

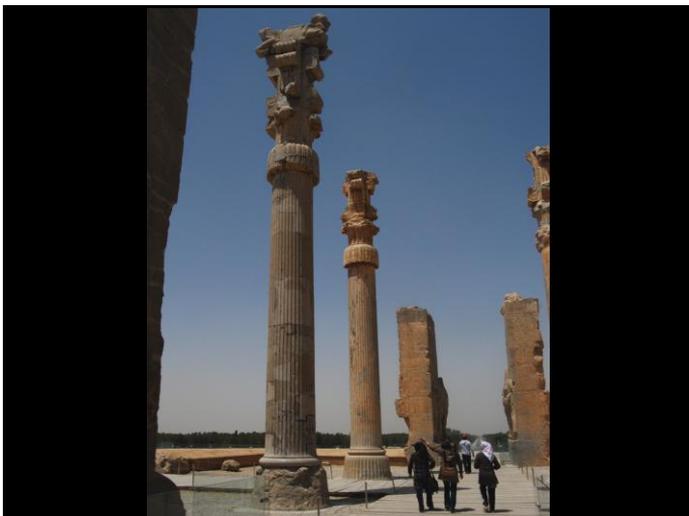
③ -1 シラーズ近郊のペルセポリス(アケメネス朝の祭祀都市:前6~前4世紀)

(英版ウィキペディアより)

ペルセポリス、正面より:前方基壇の上に聳えるのは、ケセルクセス門(万国の門:次ページに)。



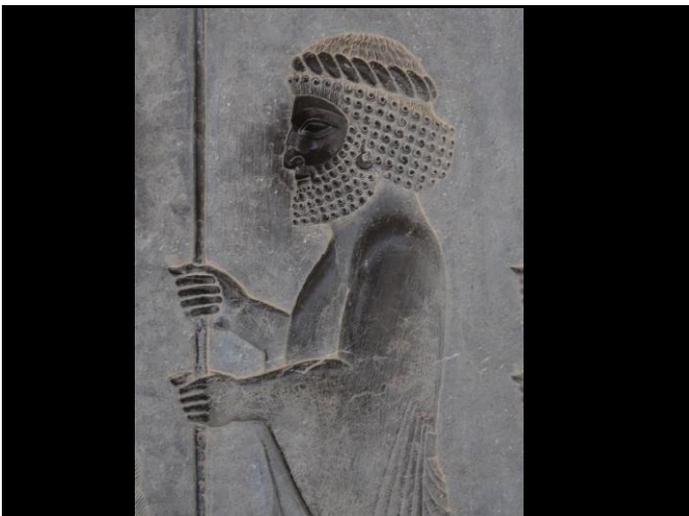
像の足もとには、
1800年以來の、欧文による
多くの落書き(線刻文字)が。



ペルセポリス、アパダーナ(謁見の間)の列柱。



ペルセポリス、アバダーナ(謁見の間)入り口階段の側面。

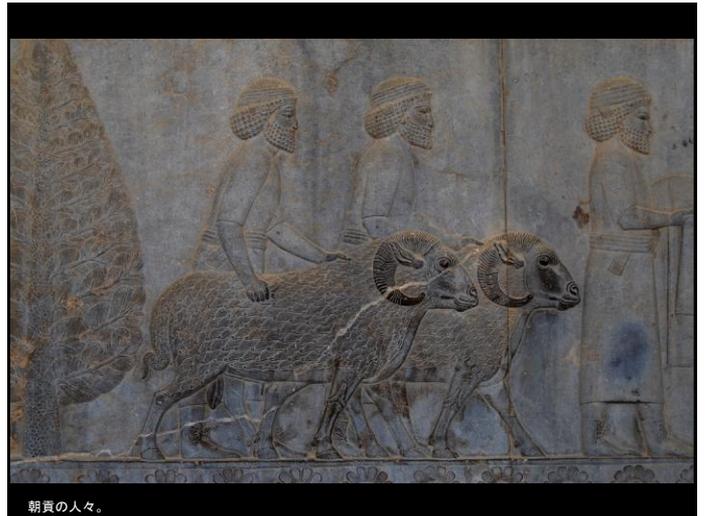




牡牛を襲う獅子。春分頃から太陽の勢いが強まる。季節の変わり目を象徴するという。

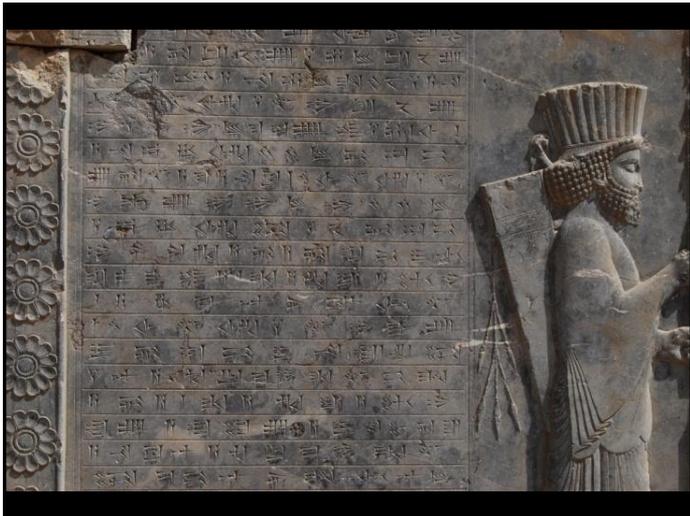


次ページに、この上部を。



朝貢の人々。





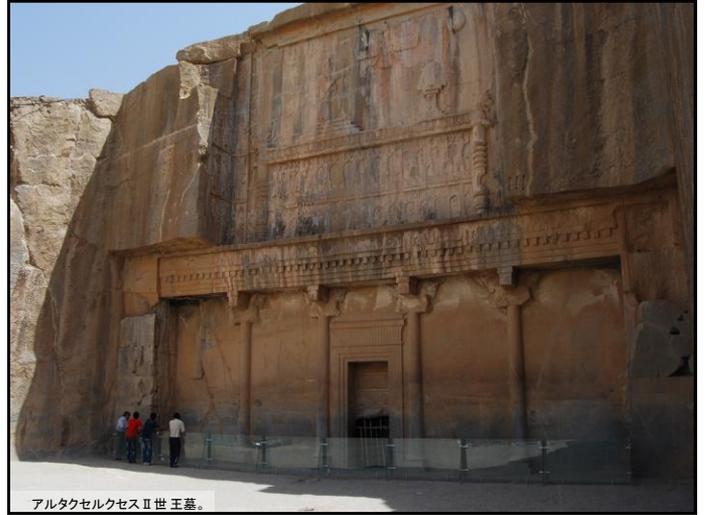
クセルクセス I 世宮殿
(ハディース)の、大王と侍臣。



百柱の間の、勇者と野獣。



百柱の間より、アルタクセルセス二世王墓を見る。
次ページで、その墓室前へ登る。



アルタクセルセス二世王墓。



墓のレリーフに見る建物の構造。双頭の鷲像の間に梁が入る。



アルタクセルセス二世王墓より見たペルセポリス中央部分。手前より、兵營、百柱の間、アバダーナ(鷲見の間)。
左奥は博物館。その手前は宝庫など。(アバダーナには、ここに見るように、現在は、大きな板敷の屋根がかかっている。)



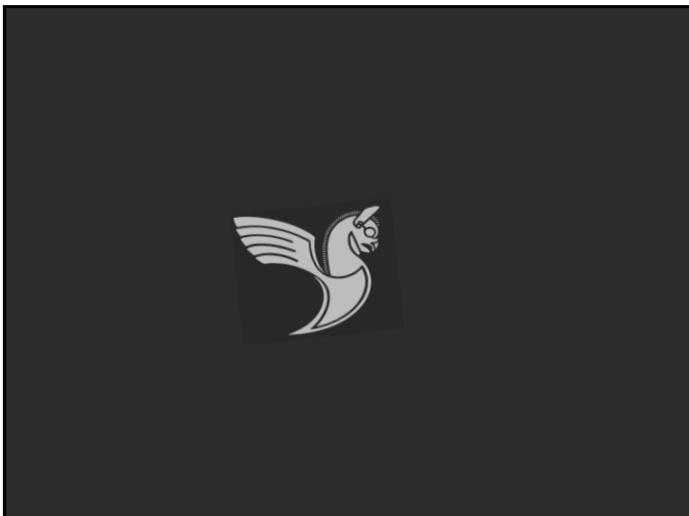
研究者により復元された神殿の構造。石製列柱の上はレバノン杉材で覆われた屋根。



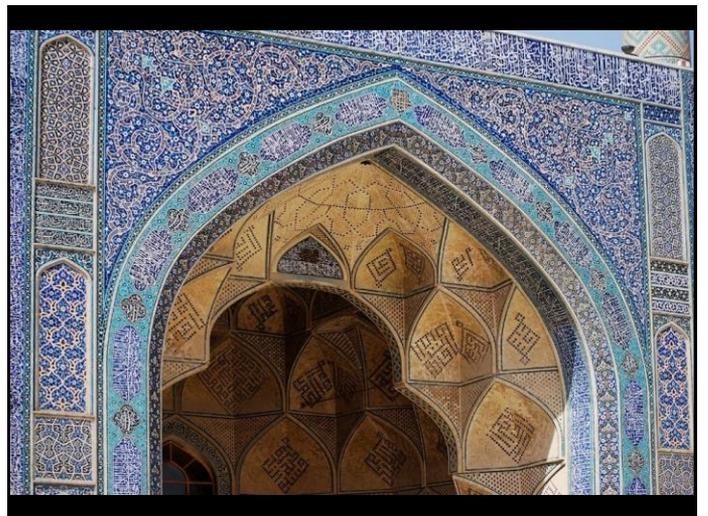
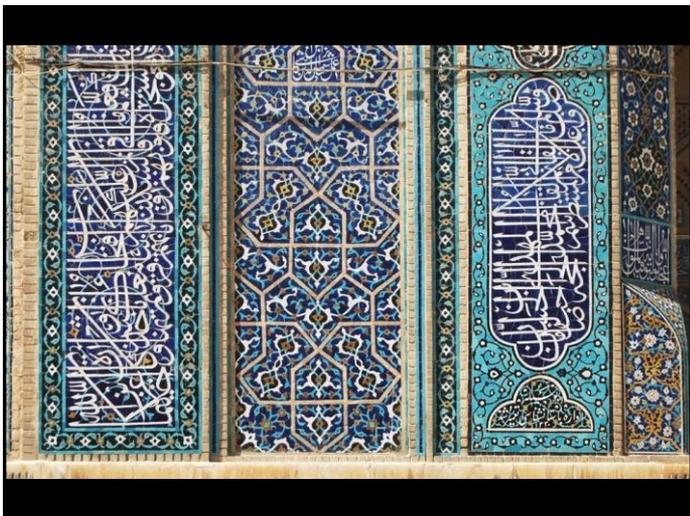
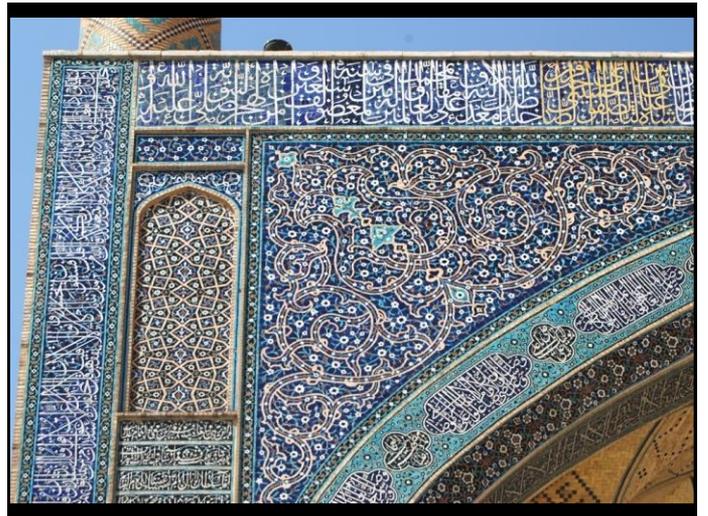
イラン航空シンボルマークの、双頭の鷲。

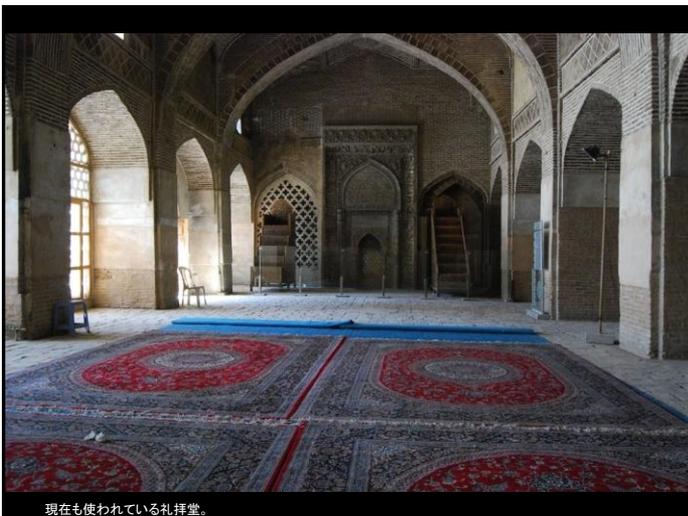
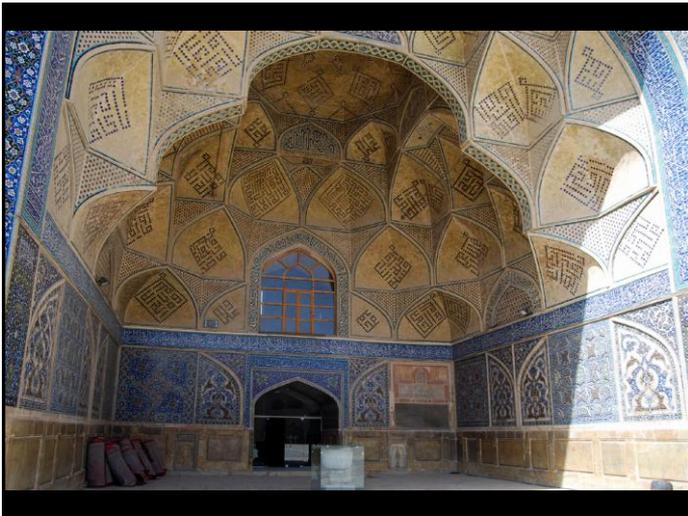
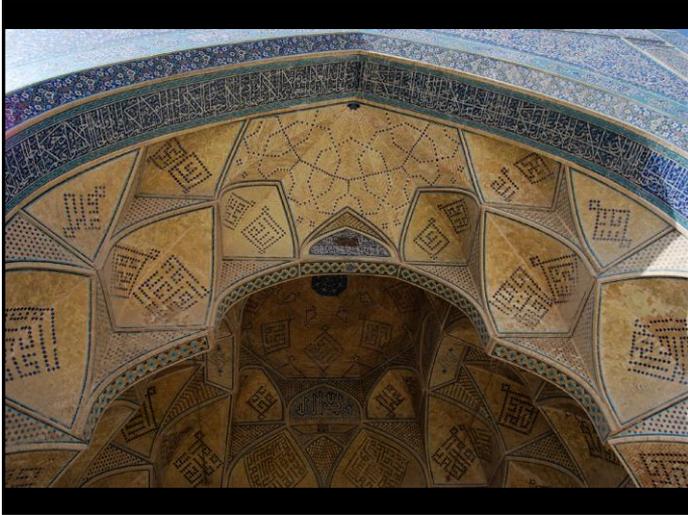


イランは、出版の面でも大国。売店にあった、ペルセポリス関係の書籍。



イスファハーンにある現存のモスクでは、最も古いもの。創建は8世紀で、12世紀以降に改築を繰り返す。モンゴル・イラン朝の13～14世紀、サファヴィー朝時代の16～17世紀にも改修が進められ、「ペルシア・イスラーム建築の博物館」の様相。

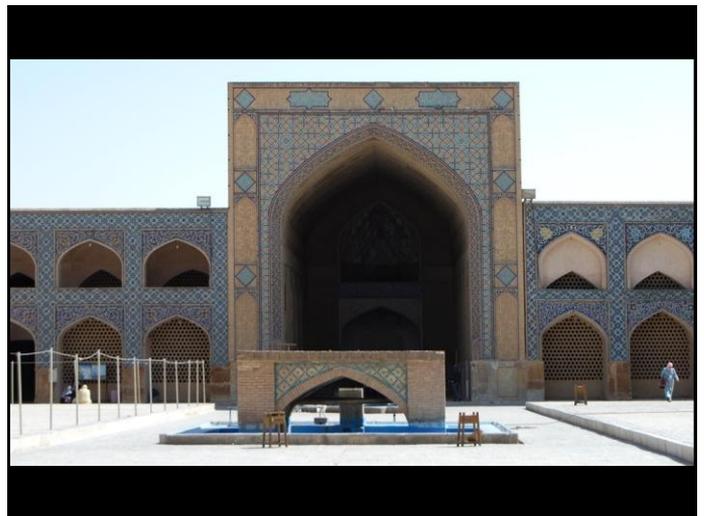
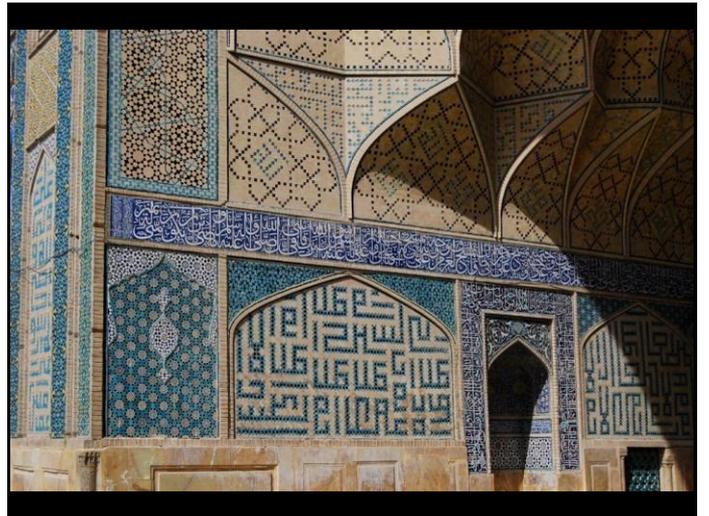
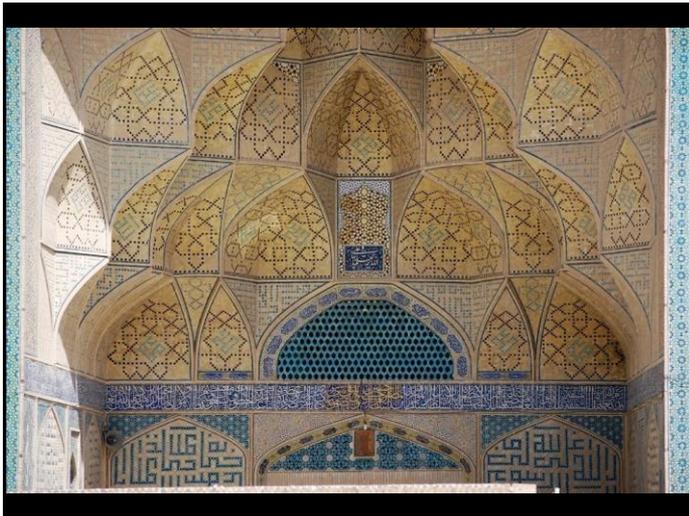




現在も使われている礼拝堂。

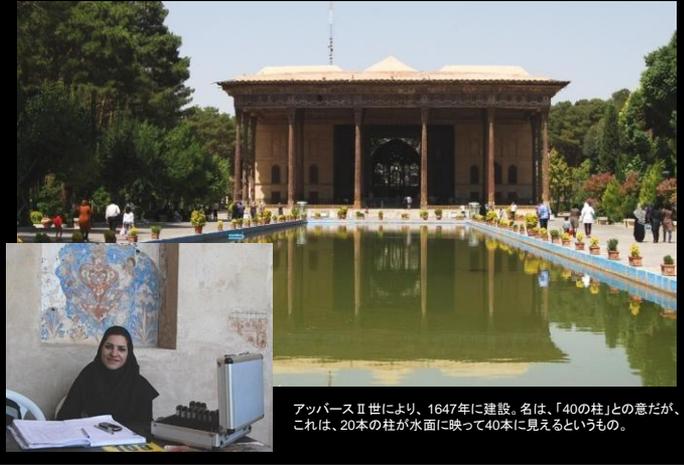


壁面には、ホメイニ師が！？



「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

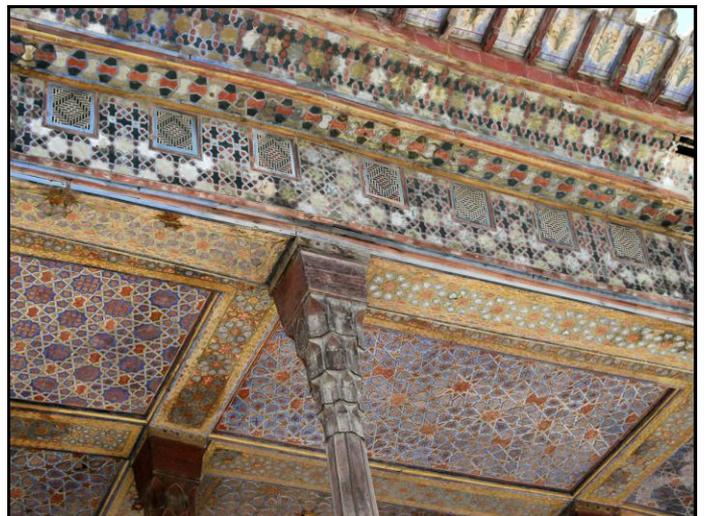
イスファハーン チェヘル・ソトゥーン宮殿(庭園博物館)

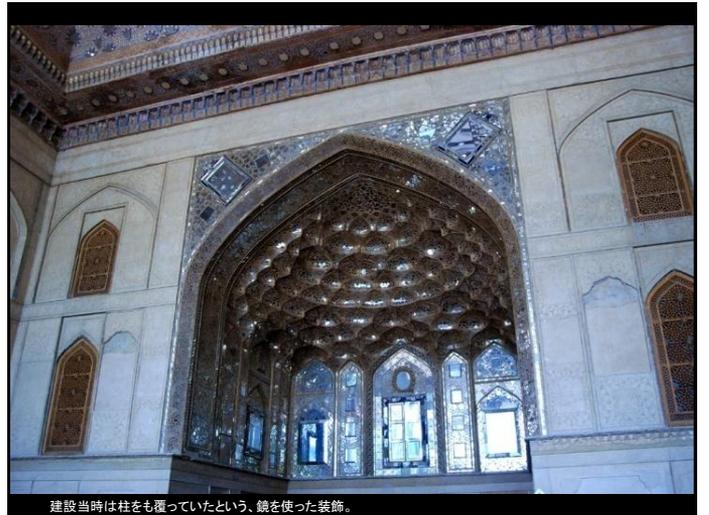
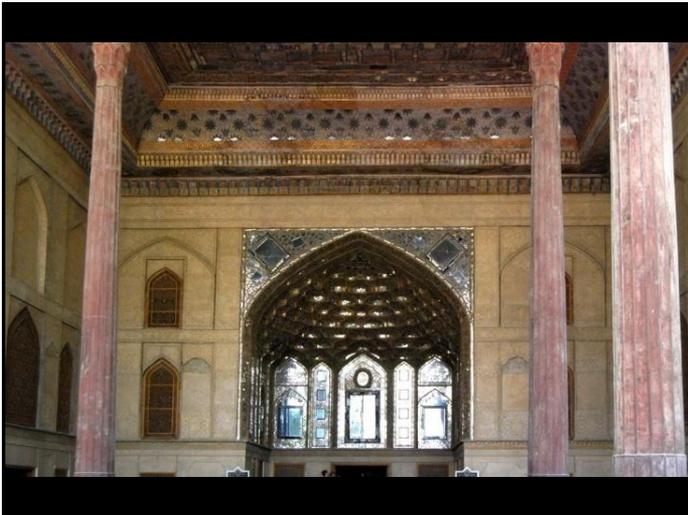
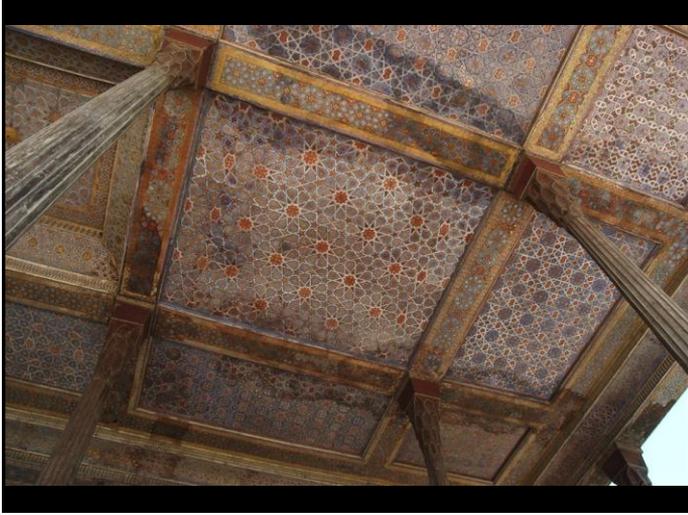


アッバース II 世により、1647年に建設。名は、「40の柱」との意だが、これは、20本の柱が水面に映って40本に見えるというもの。



建物外壁と内部(一部)は、当時、オランダから招かれた画家による絵が飾る。



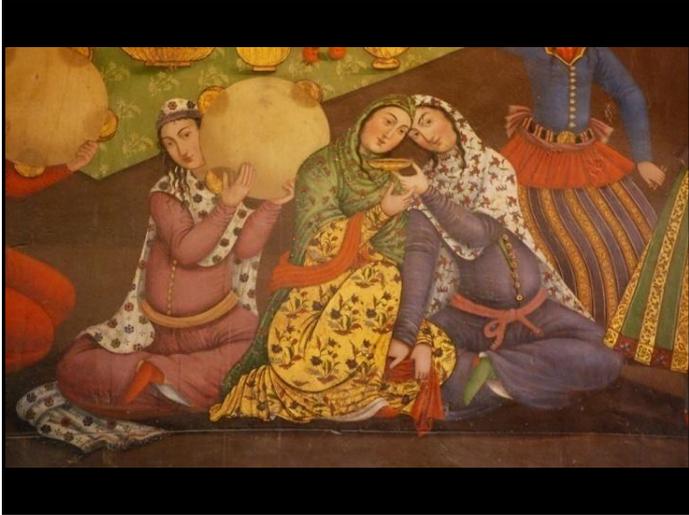


建設当時は柱をも覆っていたという、鏡を使った装飾。

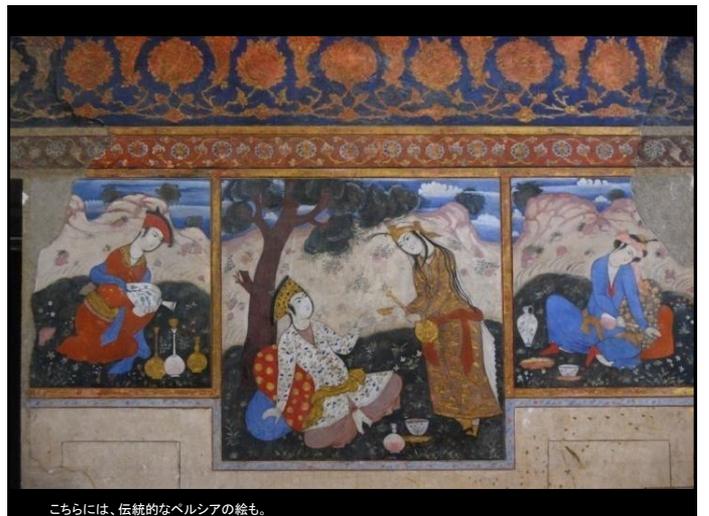
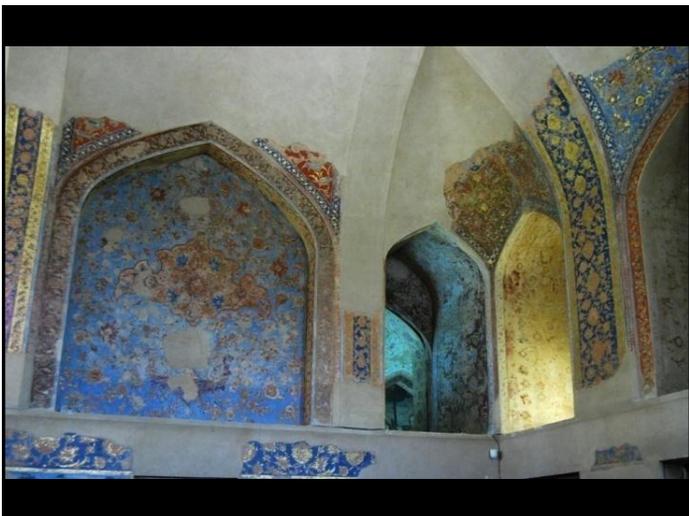


壁面には、サファヴィー朝の栄華を偲ばせる歴史画が。



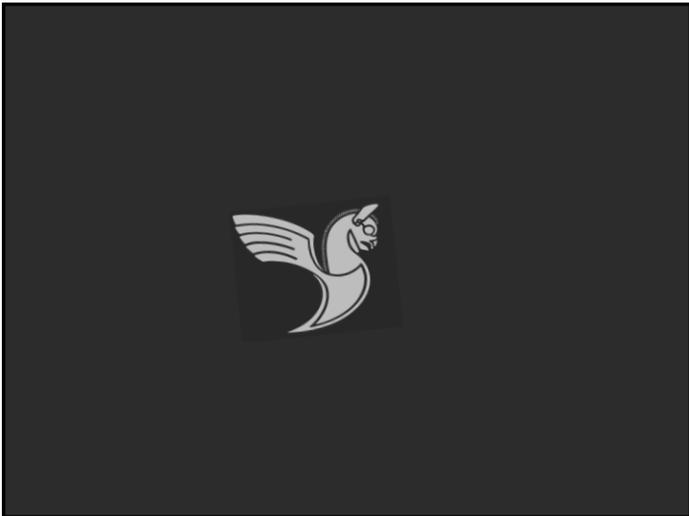
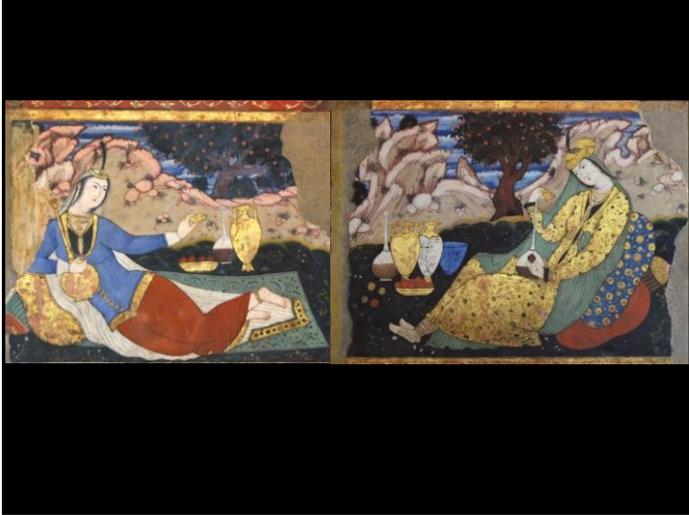


左人物の部分拡大を、次ページに。



こちらには、伝統的なペルシアの絵も。

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



③ -2 つき イсфаハーン「王の広場」と、その各種建物、市場など

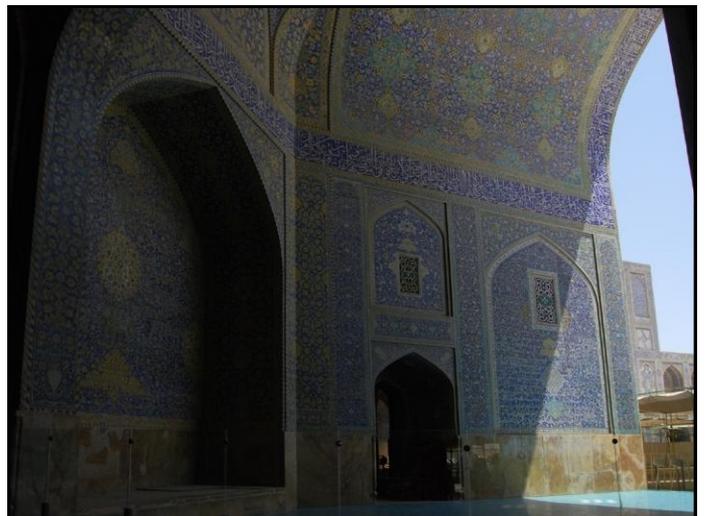
16世紀末、サファヴィー朝のアッバース1世による

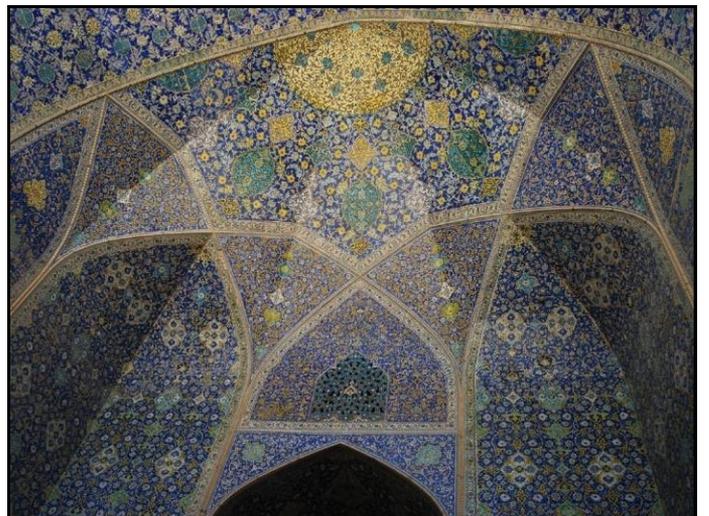
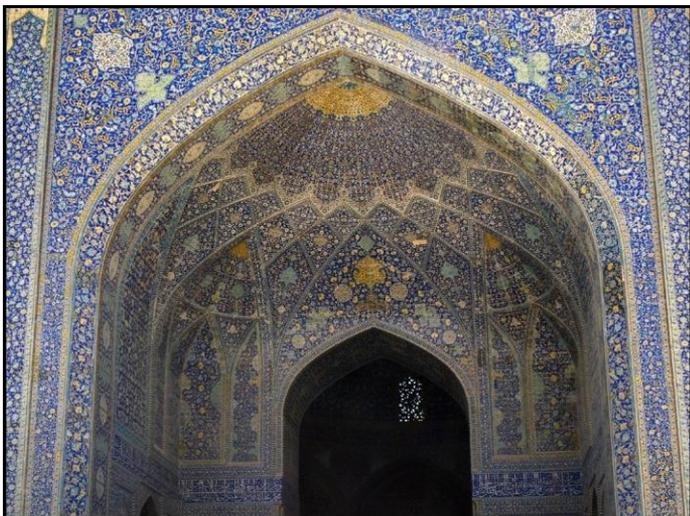


「王の広場」(現称「イマーム広場」)の本来の姿は、左のようらしい。
(ともに、イсфаハーン・Kowsarホテルのパンフレットより。)
左は、上写真の正面「ブルーモスク」の左手にある、「シェイフ・ロフオッラ・モスク」。

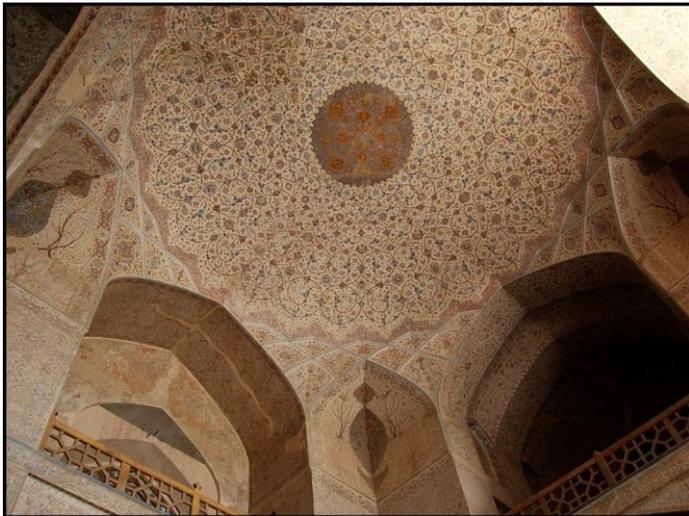
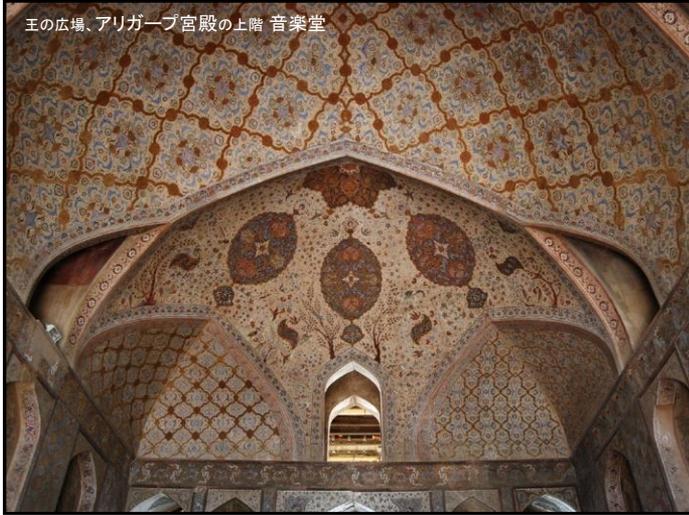


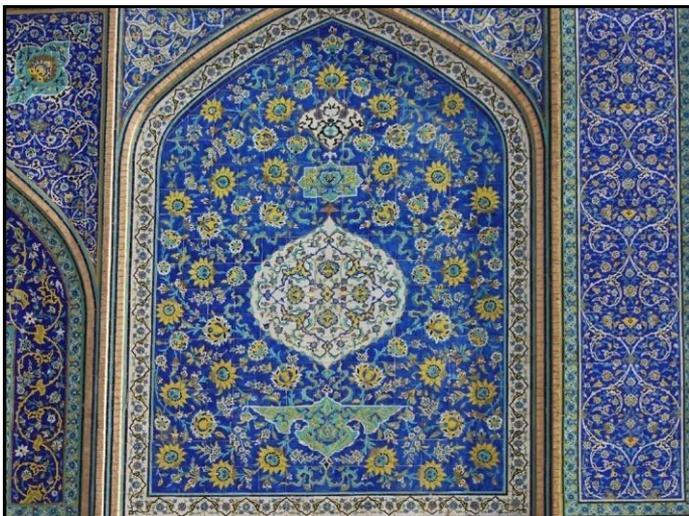
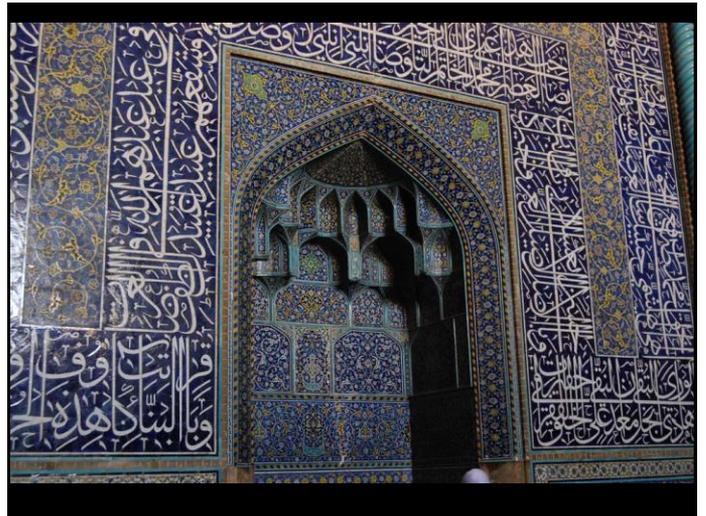
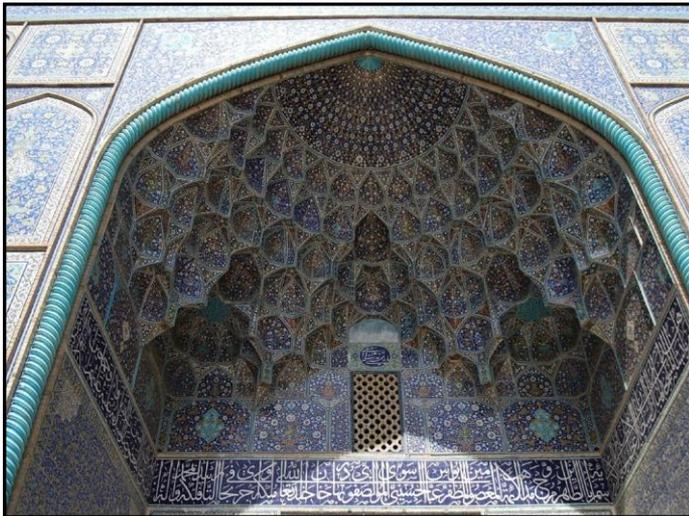
王のモスク(ブルーモスク:現称「イマームモスク」)











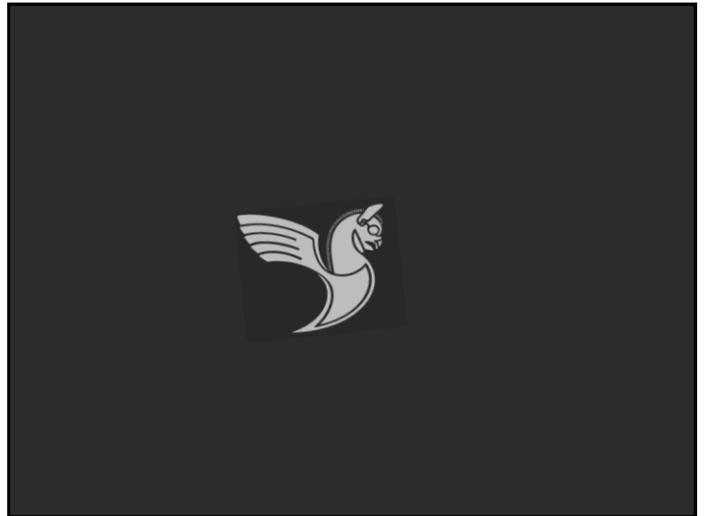
「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



天頂部から光が差しているように見えるが、これは、天井曲面での光の反射が見せる現象。

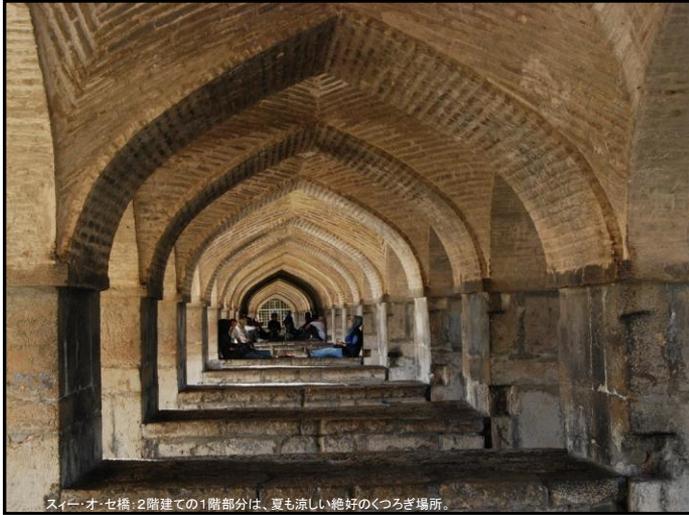


イスファハーン「王の広場」。夏の涼しい夕暮れともなれば、大勢の人々が。



西から東に流れるサーヤンデ河にかかる、スィー・オ・セ橋(33アーチ橋)の上流側。この東2kmにハージュ橋。





スィー・オ・セチ橋:2階建ての1階部分は、夏も涼しい絶好のくつろぎ場所。



ハーजू橋の上流(西)側;夏は洪水期だが、融雪期には満々と水をたたえる。(左はコウサルホテルのバンフより。)



ハーजू橋の下流(東)側。





以下、ハーजू橋 上部通路の装飾。





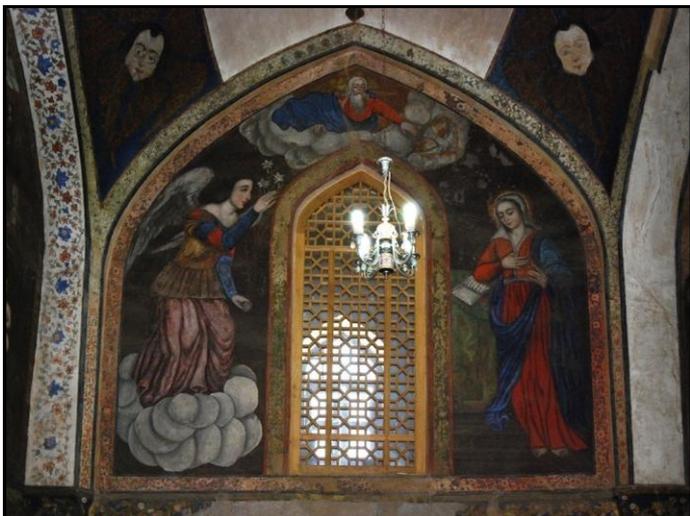
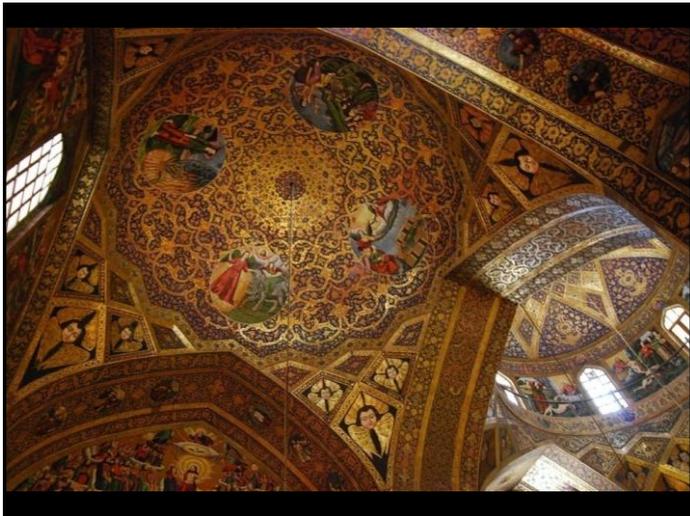
スィー・オ・セ橋: 涼しい夕暮れともなれば、燈がともって、人々のそぞろ歩きの。



アルメニア人居住地区にあるヴァーンク教会(アルメニア正教)

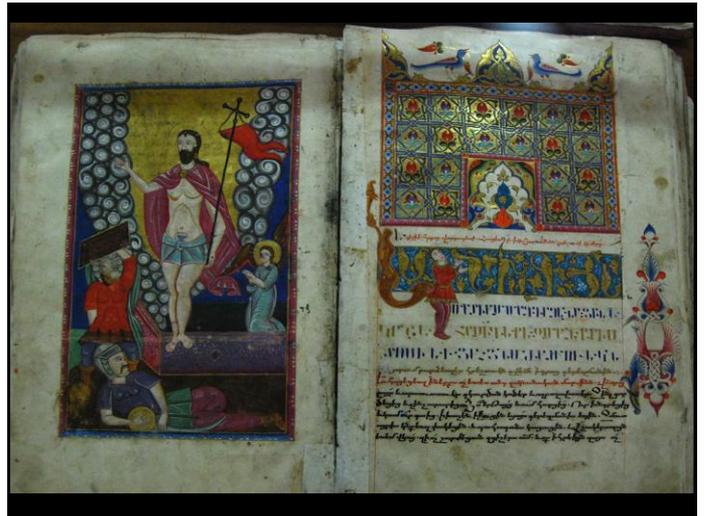


アルメニア人居住地区。



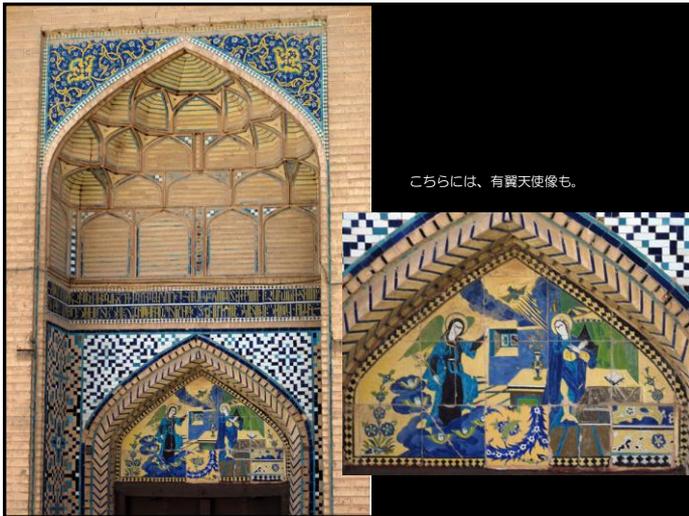


豪華装幀の聖書や聖歌集が。





家族一行で刊行の人たち。イランでは、家族の結束が重んじられ、核家族化は考えられない。

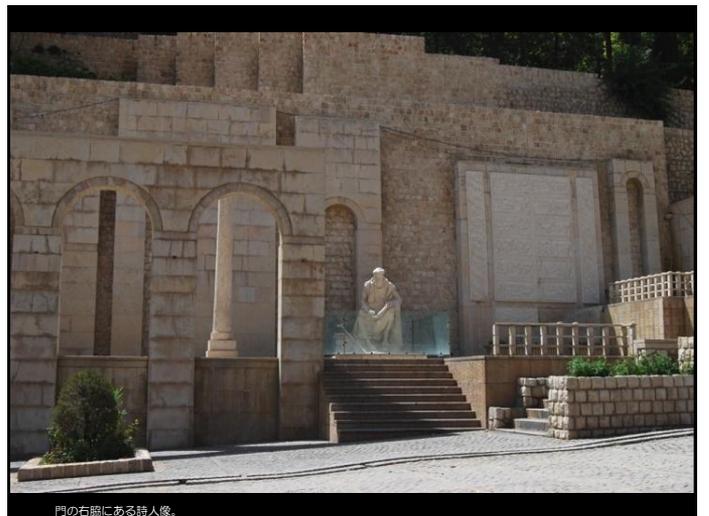


こちらには、有翼天使像も。



③ -2 つつき 今度は、シラズ市内 (ペルセポリスの南西方)

市内への入り口にある、コラン門。



門の右脇にある詩人像。

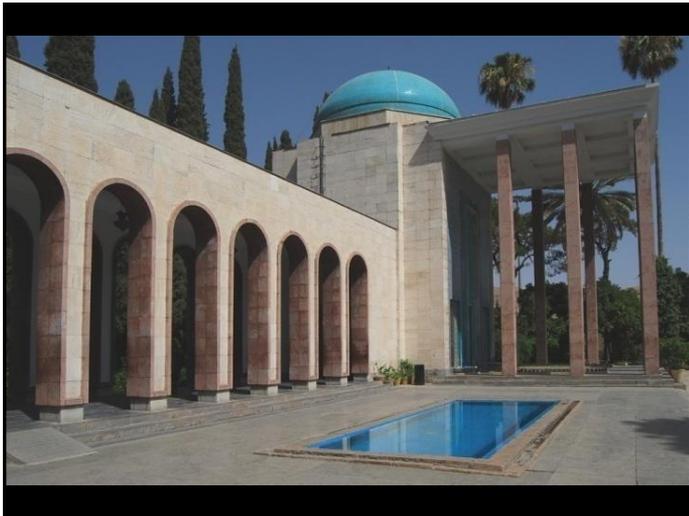


門をくぐって、外側を見る。詩人像は、門の外、左に。

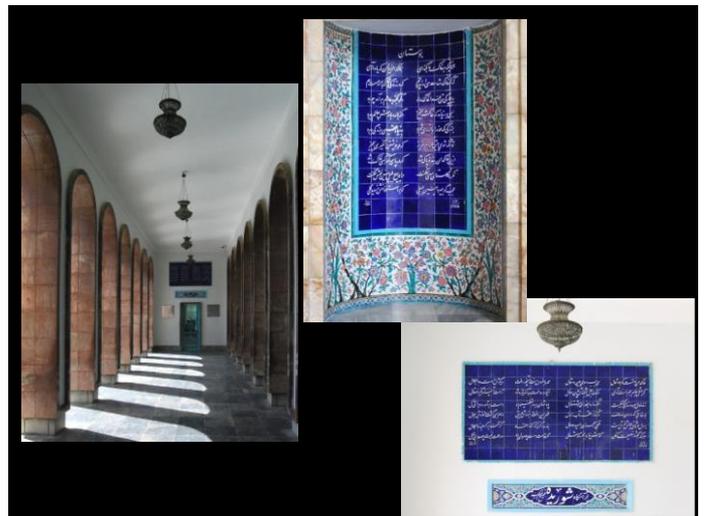
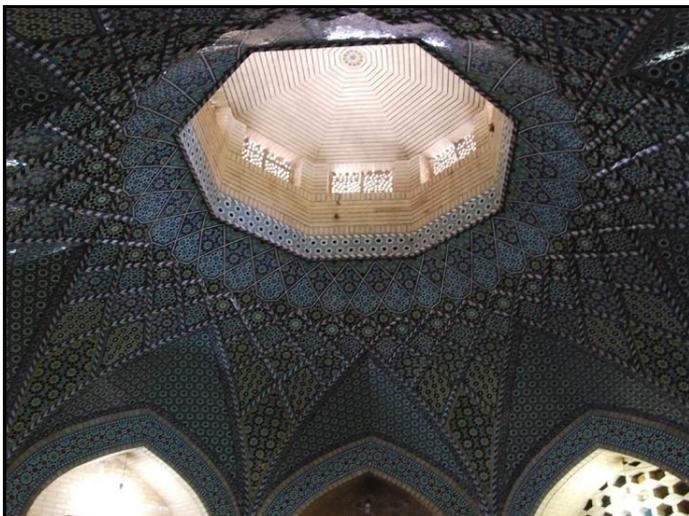


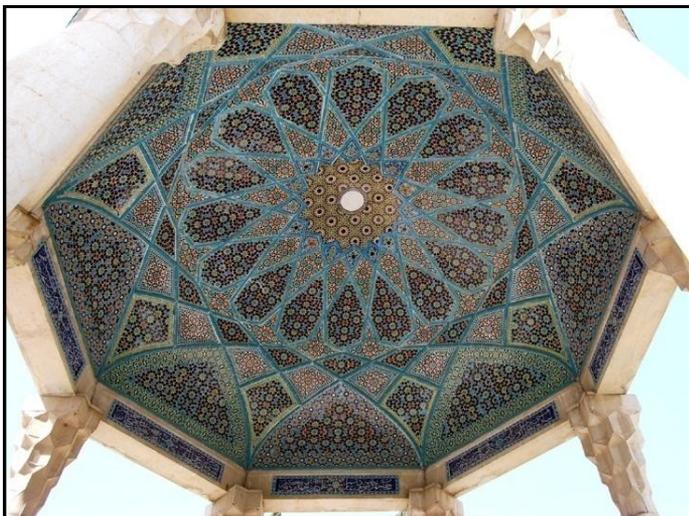
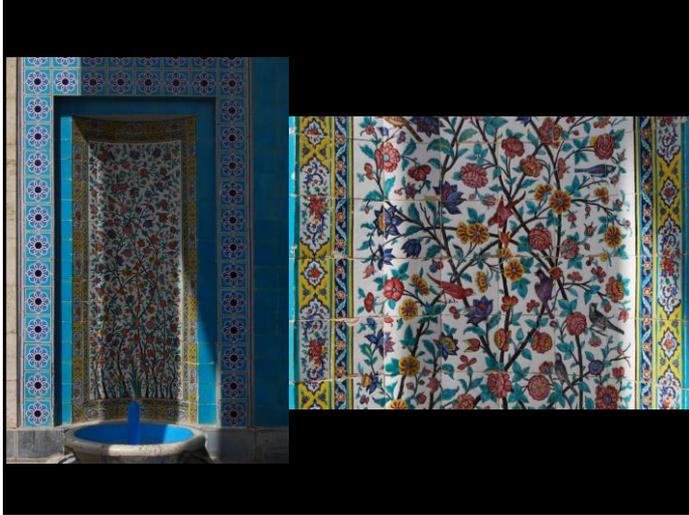
古くから、詩人が尊ばれる国

水と緑が豊かな、サアディー廟。



ドーム屋根下の、大理石製サアディーの棺。

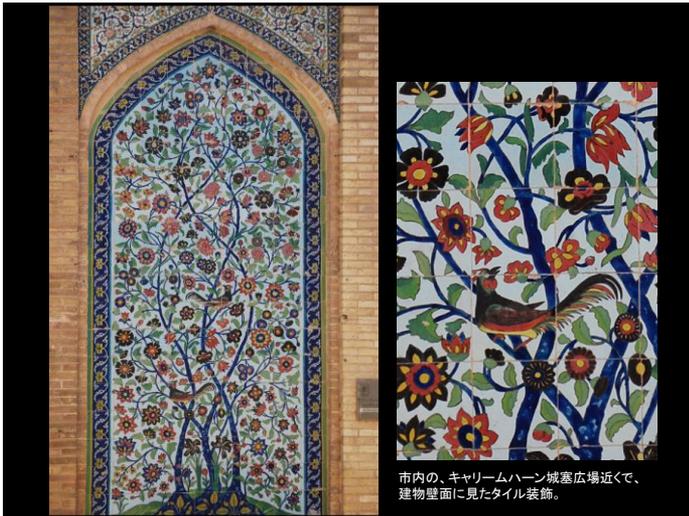




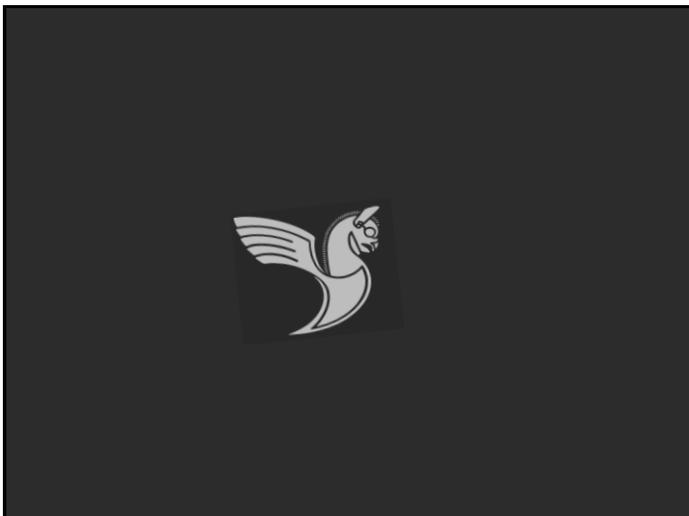
「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



ともに詩を語るべき友を待つ。

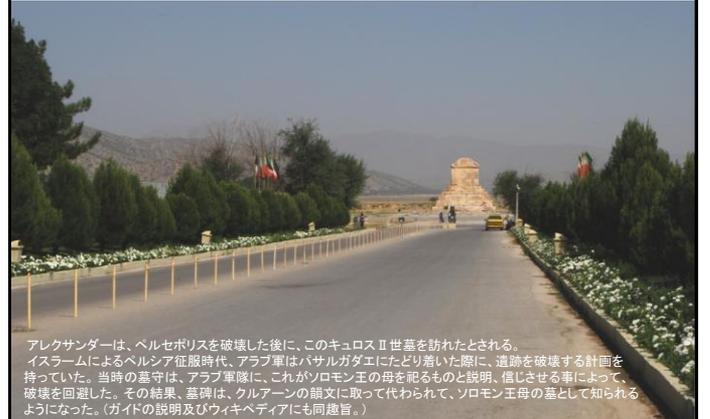


市内の、キャリムハーン城塞広場近くで、
建物壁面に見たタイル装飾。



④ -3 アケメネス朝発祥(前6世紀)のハサルガダエ遺跡とキュロス王墓など

ペルセポリスの北東にあるハサルガダエは、紀元前546年にキュロスII世によって建設が開始されたペルシャ帝国の最初の首都。後に、ダレイオス(ダリウス)I世がスーサに遷都。



アレクサンダーは、ペルセポリスを破壊した後に、このキュロスII世墓を訪れたとされる。イスラームによるペルシア征服時代、アラブ軍はハサルガダエにたどり着いた際に、遺跡を破壊する計画を持っていた。当時の墓守は、アラブ軍隊に、これがソロモン王の母を祀るものと説明、信じさせる事によって、破壊を回避した。その結果、墓碑は、クルアーンの韻文に取って代わられて、ソロモン王母の墓として知られるようになった。(ガイドの説明及びウィキペディアにも同趣旨。)



キュロスII世の墓と伝えられる。墓室は上部に。



酷乾の大地には、遺跡を包蔵するマウンドが点々と。



丘の上に聳える、タヘタフト城塞遺址。



パサルガダエは、ダレイオス(ダリウス)I世がスーサに遷都するまでの首都。



「魚」を主題としたものが多い。



この石欄に刻まれた碑文を、次頁に。



キュロス I 世の碑文。上から、古代ペルシア語、エラム語、バビロニア語の文字。
「朕はアケメネス朝の王、キュロスなり。」



烽火線(の祭壇)との間も。

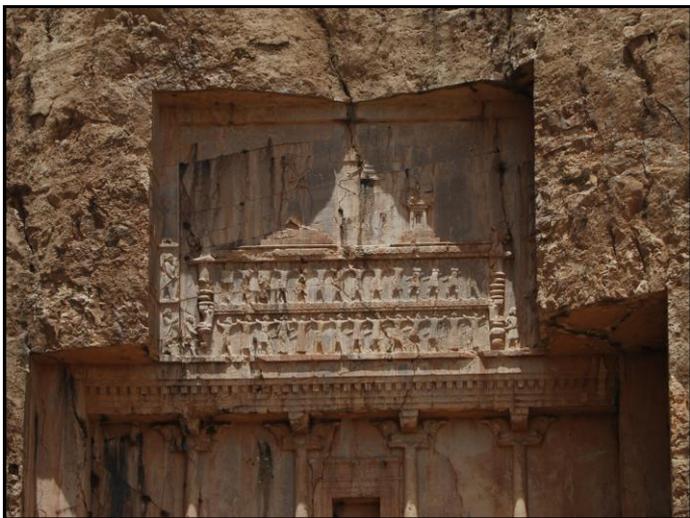


④ -4 ササン朝(3~7世紀)のナグシェ・ロスタム遺跡など



(英版ウィキペディアより。)

ペルセポリスの北方にある巨岩の遺跡、ナグシェ・ロスタムのパノラマ写真。
岩壁にはアケメネス朝時代の王墓や、ササン朝時代のレリーフ(浮き彫り)が刻まれている。
付近にはナグシェ・ラジャブもある。(10数ページあとに紹介。)
4つ並んだ墓は、右から、クセルクセス I 世、ダレイオス(ダリウス) I 世(これのみ碑文から確実視)、
アルタクセルクセス I 世、ダレイオス II 世と言われている。





ナルセ I 世 (ササン朝 在位: AG293~302年) の叙任。
ゾロアスター教の最高神アフラマズダー神から、王権の象徴を授与される。



ダレイオス I 世の墓(右)と、その下に「バハラム II 世の勝利」レリーフ。その左は「シャープール I 世に降服する
ローマ帝国ウァレリアヌス帝」レリーフ。左の墓は、アルタクセルセス I 世。以下、順に



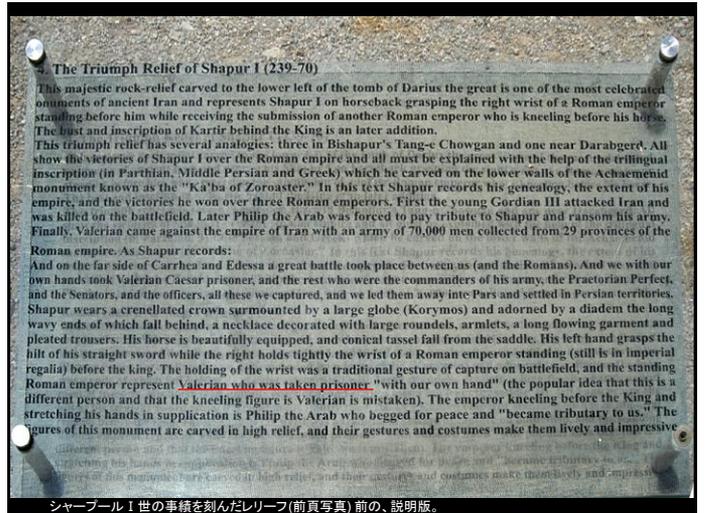
ダレイオス I 世の墓。アケメネス朝ペルシア第3代の王(在位: BC522~486年)で、通称「ダレイオス大王」。



ダレイオス I 世墓の下に彫られた、「バハラム II 世(在位: 276~293年)の勝利」。

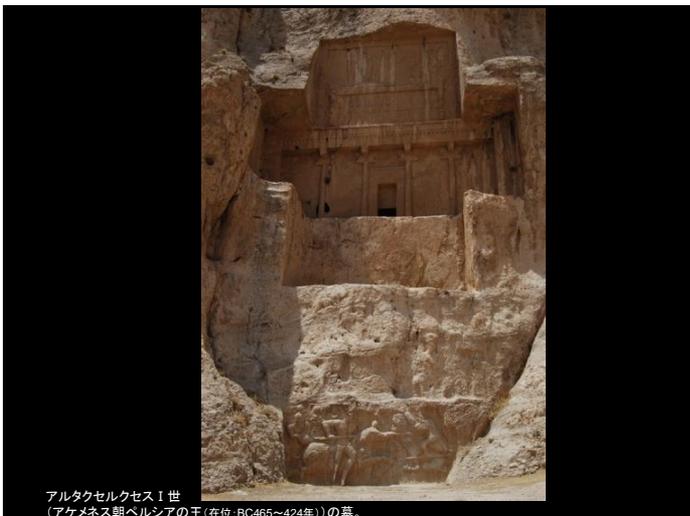
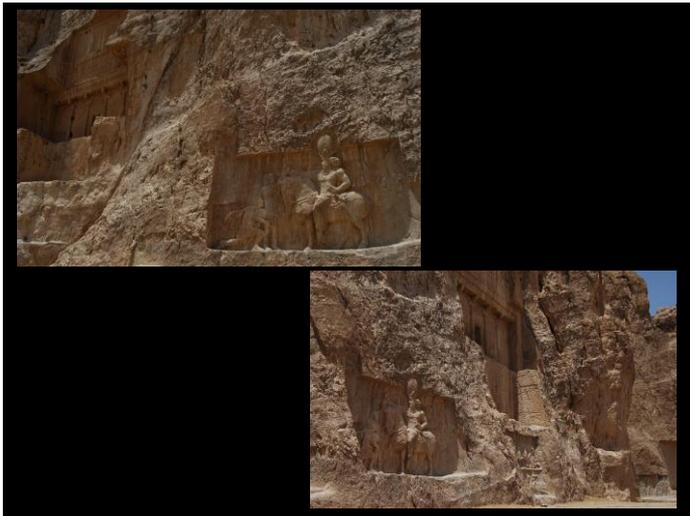


騎乗のシャープール I 世(在位: 241~272年と、降服するローマ帝国・ウァレリアヌス帝(中央との説)ら。
西暦260年のエデッサの戦い。



The Triumph Relief of Shapur I (239-70)
This majestic rock-relief carved to the lower left of the tomb of Darius the great is one of the most celebrated monuments of ancient Iran and represents Shapur I on horseback grasping the right wrist of a Roman emperor standing before him while receiving the submission of another Roman emperor who is kneeling before his horse. The bust and inscription of Kartir behind the King is an later addition.
This triumph relief has several analogies: three in Bishapur's Tang-e Chowgan and one near Darabgerd. All show the victories of Shapur I over the Roman empire and all must be explained with the help of the trilingual inscription (in Parthian, Middle Persian and Greek) which he carved on the lower walls of the Achaemenid monument known as the "Ka'ba of Zoroaster." In this text Shapur records his genealogy, the extent of his empire, and the victories he won over three Roman emperors. First the young Gordian III attacked Iran and was killed on the battlefield. Later Philip the Arab was forced to pay tribute to Shapur and ransom his army. Finally, Valerian came against the empire of Iran with an army of 70,000 men collected from 29 provinces of the Roman empire. As Shapur records:
And on the far side of Carrhaea and Edessa a great battle took place between us (and the Romans), and we with our own hands took Valerian Caesar prisoner, and the rest who were the commanders of his army, the Praetorian Perfect, and the Senators, and the officers, all these we captured, and we led them away into Pars and settled in Persian territories. Shapur wears a crenellated crown surmounted by a large globe (Korymbos) and adorned by a diadem the long wavy ends of which fall behind, a necklace decorated with large roundels, armlets, a long flowing garment and pleated trousers. His horse is beautifully equipped, and conical tassels fall from the saddle. His left hand grasps the hilt of his straight sword while the right holds tightly the wrist of a Roman emperor standing (still in imperial regalia) before the king. The holding of the wrist was a traditional gesture of capture on battlefield, and the standing Roman emperor represent Valerian who was taken prisoner "with our own hand" (the popular idea that this is a different person and that the kneeling figure is Valerian is mistaken). The emperor kneeling before the King and stretching his hands in supplication is Philip the Arab who begged for peace and "became tributary to us." The figures of this monument are carved in high relief, and their gestures and costumes make them lively and impressive.
シャープール I 世の事績を刻んだレリーフ(前頁写真) 前の、説明版。

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



ダレイオス(ダリウス)二世
(アケメネス朝ペルシアの王(在位:BC422~404年))の墓。



ダレイオス二世墓の下に彫られた、「シャープール二世(在位:308~379年)の勝利」。



アルダシール一世(在位:AC226~240年)のレリーフ **私鼻、ナグシェ・ロスタムで一番見事なレリーフ**
アフラマズダー神から王権の象徴を授けられ、ササン朝ペルシアの初代君主(シャール・ハーン・シャール:諸王の王)に。
これによって、400年続いたアルサケス朝/ハルディアの時代が終わり、400年続くササン朝の始まりとなる。
なお、アルダシール一世の後は、子のシャープール一世(前述)が継いだ。(ウィキペディアなどによる。)
これと次ページのレリーフは、前に説明の全景写真の、さらに左にある。



そのすぐ右にあるレリーフ。



ゾロアスター教の祭壇とも言われる？



ナグシェ・ロスタム、右側に続く岩壁。

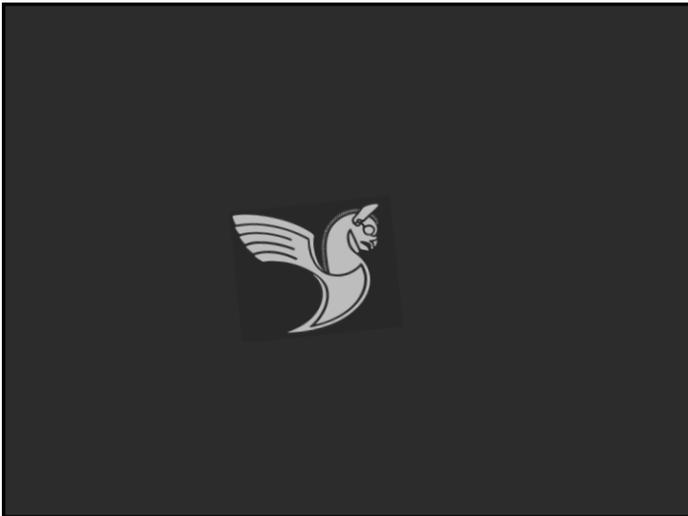
「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



ナグシェ・ラジャブ遺跡。(シャープール I 世の行軍。)



同じく、ナグシェ・ラジャブ遺跡にて。



③ -5 アラムート城址:ハッサン・サッバーフの城塞で、13世紀 モンゴル軍によって壊滅



テヘランから、高速道路を西北西へ。火力発電所を通過。



6車線高速道路を右へ折れて、ガスビン方面へ。
(市内へは入らず、途中で2000mの山越え。全線2車線舗装)









城塞は、外部、内部と別に、修復工事中。

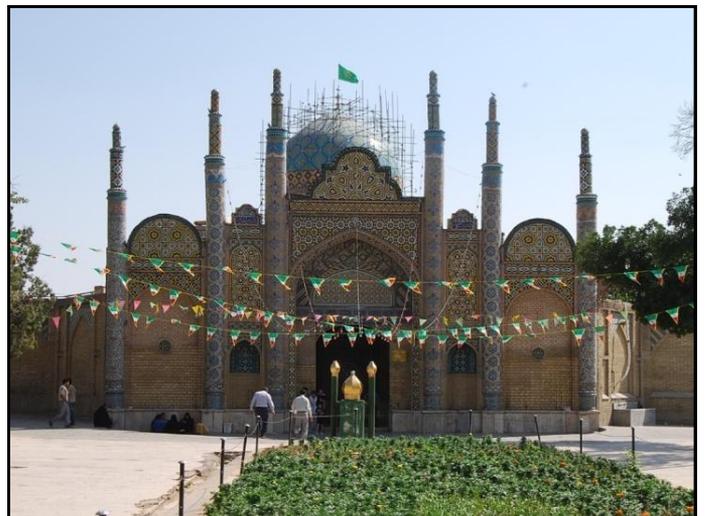
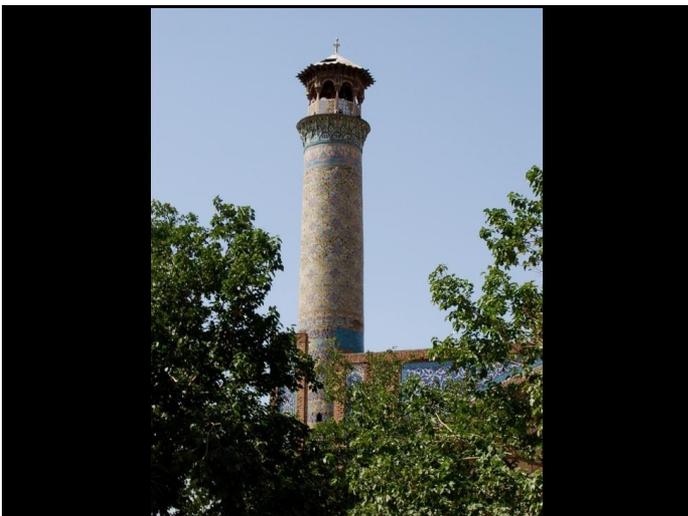


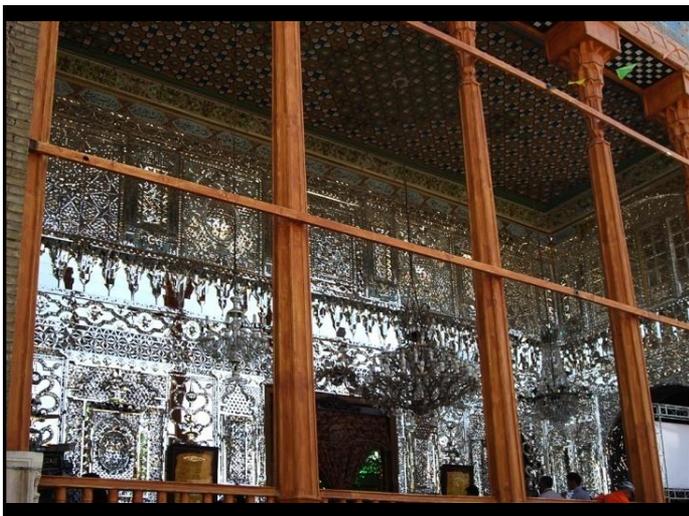
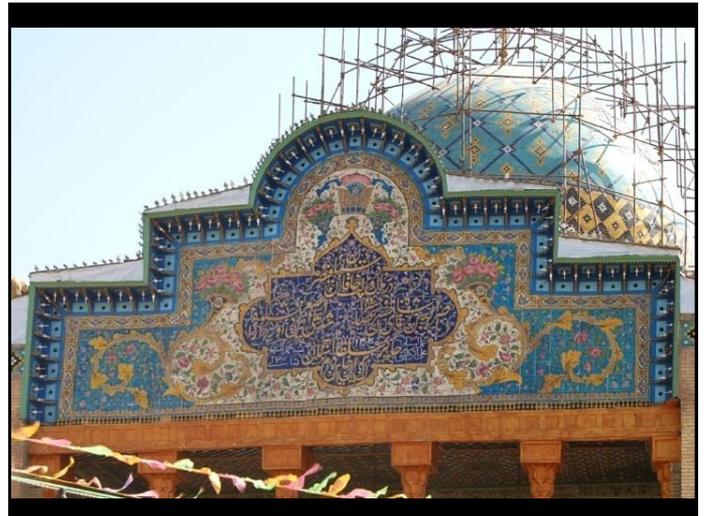
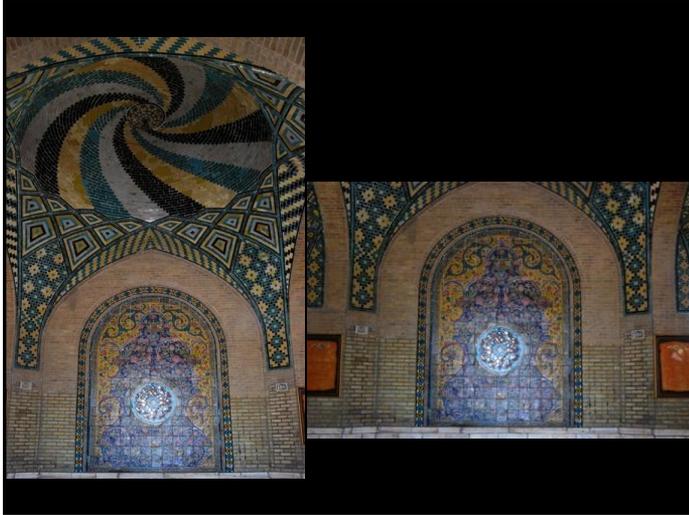
山上の平坦部は狭く、ここに、伝承の「地上の楽園」が築かれたとは思えない……。あつたとすれば、それは別の場所で、
ここは、フラグハーンに抗した「暗殺教団」(ニザール派)が最後に立てこもった城址ではないのか？





帰路、ガスピン市内へ。サファヴィー朝が16世紀末にイスファハーンに遷都するまで、都としていた。





モスクの内外とも、無数の鏡の細片による装飾。

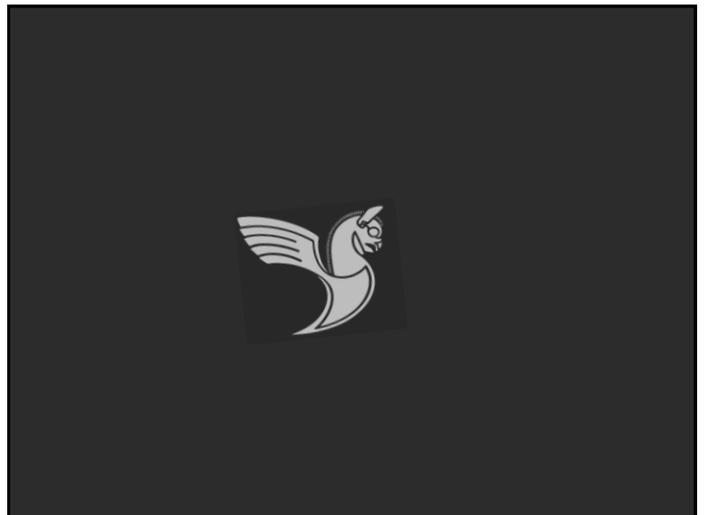
「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附：19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



モスクを出たところで、たまたま出逢ったお葬式参列の人々。次ページのように、男女は別。



境内にある、イランイラク戦争戦死者の追悼銘板。



④ 19世紀～20世紀初頭におけるペルシアと周辺諸国の踏査記録

— 中央アジアの覇権を巡って英露がしのぎ削っていた時代の、
S. ヘディンらによる報告書に見る 当時の状況。

スヴェン・ヘディン

Sven Anders Hedin: 1865.2.19～1952.11.26 スウェーデンの地理学者で、中央アジア探検家。ストックホルムの中流家庭に生まれた。

A.E.ノルデンショルドの北東航路探検に感銘を受け、生涯師事した。ベルリン大学ではヒトホーフェンの指導をうけて、中央アジア探検を決意した。



ノーベラー族が経営するパーウ・油田の高級技師家庭の家庭教師に招かれ、その帰路に、ペルシア、メソポタミアに旅行(1885～86年)。その後、スウェーデン王オスカル2世がペルシアに派遣した使節団の通訳として同行し、任務終了後に単独で、メルヴ、フハラ、サマルカンド、カシュガルなどを旅行(1890～91年)。

その後は、広く中央アジア、チベット、中国を探検して、膨大な報告書と地図を残した。1908年には、探検旅行の帰途に来日し、東京地学協会での講演ほか、大歓迎を受けた。



その間、1902年に貴族に列せられ、1909年には、英国から「ナイト」の称号を得る。

第二次大戦後には、国内ではナチス協力者として批判されるが、著述に専念して膨大な研究成果を世に出し、1952年にストックホルムで没した。

A.E.ノルデンショルドの北極海での越冬(上图)と、その華々しい帰途。

ご参考：スヴェン・ヘディン、1865～1952 について

スウェーデンの探検家、中央アジア探検の第一人者。1893年から1908年までの間に、現地人従者ととも3回にわたり広く中央アジアを探検旅行。第3次探検の帰途、日本を訪問。その後、1927年から1933年まで西北科学考察団(支那・スウェーデン探検隊)を、1933年から1935年まで南京政府依頼の新疆自動車探検隊を組織して、ともに、黄河上流からタリム盆地北東方面に組織的・科学的探検を実施。晩年はナチスドイツ担頭下の東欧にあって秘密外交活動、ストックホルムの自宅で長逝、87歳。

以下に、日本訪問の際の講演の最後の部分を、少々長いが転載。(『測量』2005.10月号掲載の長岡正利からの転載。)

「…予はこの學術的の探検に就ては終始予一人でこれを遂行したのである。別にこれについては助手をつけてあるのではない、従って旅行中手の忙しきことは又一通りでなかつた。先づ予は總て予の探検線路の地図を出る得るだけ精密に作らんと試みたのである。即ち是等の前人未踏の地を踏査しこれを世界に紹介するに付ては、地圖の製作はもつとも肝要なることであると信じたからである。予は探検線路の大部分は平板測量をもつて測圖しつつ進んだ。先づ行程の距離を測るには、あらかじめ二百メートルの直線上を、或は駱駝に乗り或は馬に乗つて行進し、この全距離を進むに幾歩を要せしか、又何時を要せしかを測り、幾回かこの方法を繰返して其の平均数を求め、これを常に標準として行程を測りながら歩を進めた。また其の行進線路の方向は磁針によつて一々精密に測りつつ進んだのである。然しながらこれだけでは誤差のあることは冤れない、殊に日を重ぬるに従つて其の差も多くなつて来るから、予は時々一ヶ所に滞在して暗夜に天測を試み、其の頂點の経緯度を精細に測量して圖上の訂正を行ひ、そしてこの行進中には、線路上の地物は勿論その両側にある所のものは、出来得るだけこれを精密に記録することを怠らなかつた。即ち遠方の山であれば其の頂點の方位を一々測定し、或いは湖水であれば其の周囲にある種々の地物を目標としてその形を畫き、また其の水の淡・鹹…(中略)…、一の山についても、其の名稱は處によつて違ふのであるから、各方面の土人に聞き正して其の名稱を記録して置いたのである、また途上に於いて屢々種々の種族の住民に出逢つたが、なるべく彼等と言葉交へ、其の土地の種々の地名などを聞き正し、また其の風俗・習慣等を知ることには注意した。

以下、次ページへ

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料」附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

スウェン・ヘディン、前ページよりの続き。

また山を越える場合等に於ては、一々其の標高を測定した、これはアナロイド気圧計によつたが、猶ほ其の外に沸騰水気圧計・水銀気圧計をも携帯して精密に其高さを計った、殊にアナロイドは三個程精密なるものを携帯して、常時これを手放すことなく、途上の測定を等閑にしなかつたのである。また峠の頂からは常に出来る限りパノラマ的展望圖のスケッチを作り、是には主要なる山岳の方位等を一々測定して記入して置いた。此の際一方に於て又寫眞の撮影は必ず行ひつゝ進んだ、予は極めて優良なる機械を携へ、且つ探検上の経験によれば、フィルムは携帯に便利ではあるが、これよりもガラスの乾板の方が常に好結果を得たのである。是等の寫眞の現像も途中至る所に勵行して、帰國の後一纏にして現像するが如き繁雜なることを避けたのである。…(中略)…然も諸君が予の講演に向つて清聴せられたのは、予の最も光榮とする所である。また若し青年諸君等の中に本席の講演を聞き、予と志を同してアジア大陸中踏検して居る他の未發の地方を探検せんとする人が出来たならば、こは予の最も幸福とする次第である(拍手大喝采)。(山崎直方譯述、1909、『地學論叢』4輯)

文中に、当時の探検家の地図作成への真摯な態度が伺われる。
アジア内奥部についての地図の原資料は、このように測量された。



明治41(1908)年、華族会館での小村寿太郎外務大臣主催晩餐会。



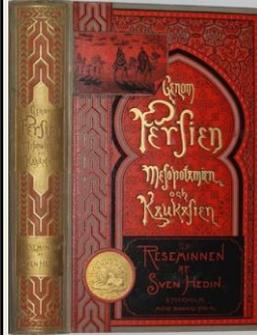
左写真、西本願寺にて大谷光瑞らと。右、山崎直方夫人らと。

ペルシアにおける S. ヘディンの事績

最初のペルシア旅行は、ノーベル族が経営するバクー油田(カスピ海西岸)技師の家庭教師として招かれ、半年で仕事を終えて、ペルシア人仲間と、テヘランの南へ旅行。戻って、バクーからトルコ経由で旅行し、帰国。(1885~86年)
紹介は、この調査行についての、ヘディン最初の報告書。
ブダペストで H.バンベリーに会う。バンベリーがこの前書きを。



この書の冒頭にある
ナスール・エッディン
ペルシア皇帝(シャール)
旅行に便宜を頂いた。



『ペルシア、メソポタミア、コーカサス横断
旅の思い出』

スウェン ヘディン

ヘルマン・バンベリー教授の序文

128図版と地図2葉

ストックホルム
(1887年刊)

【ご紹介文献などは、これ以降を含めて、金子良雄さん蒐集のもの、その内容説明も、同様。】

この書の原(表題版)より

『ペルシア、メソポタミア、コーカサス横断一旅の思い出』 S.ヘディン、1887 年、図版の紹介



Saraband i Bushan.



Fido Xerxes' palats i Persepolis.

ダイナマイト発明で巨万の富を築いたアルフレッド・ノーベルは、ノーベル兄弟石油会社を設立して、バクーで油田開発。上は、同書中のロバート・ノーベルと、油井の自噴。左下:豊富な埋蔵は、自噴とともに火災の原因ともなっていた。



カスピ海を隔てた、バクーの対岸クラスノボドスクの港泊地。タンケント方面への起点。(現・トルクメンバシ)



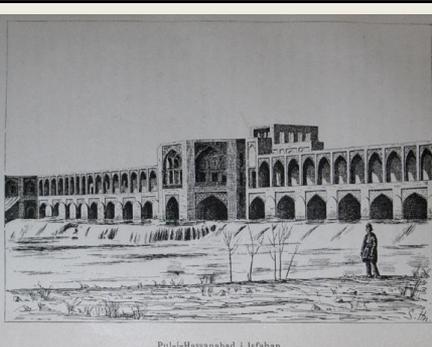
当時の、列柱が少し残っていたベルセポリス遺跡
下は、現代 (長岡、2012.7)



Sepd Mir Achmeds graf.

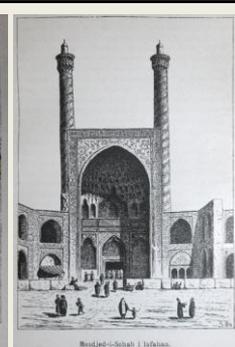


セイド・アフメド(シャール・チエテグ)廟
下は、その現代
(シラス・ホマ・ネルムのパンフより)



Pul-i-Hassanabad i Isfahan.

当時のイсфаハーン、ハーヅル橋。全面に水が流れる雪解け時期。



Masjed-i-Sheikh i Isfahan.

右はイсфаハーンのマスジェド・シェイ(王のモスク)



共に、下は現代 (長岡、2012.7) ハーヅル橋は夏の湛水期。



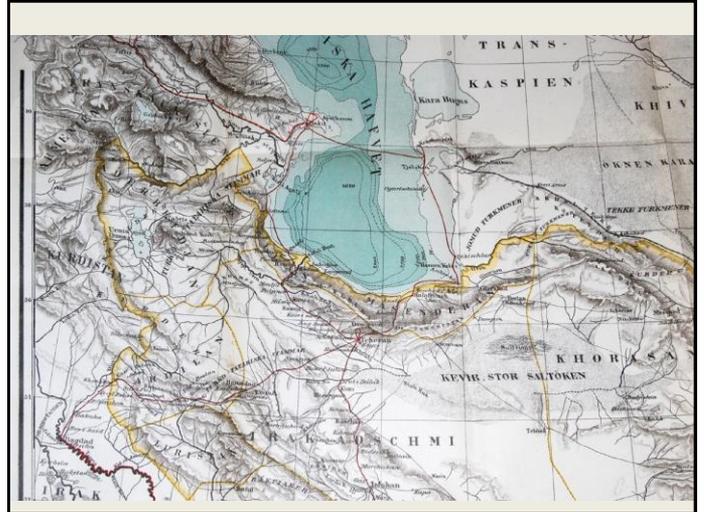
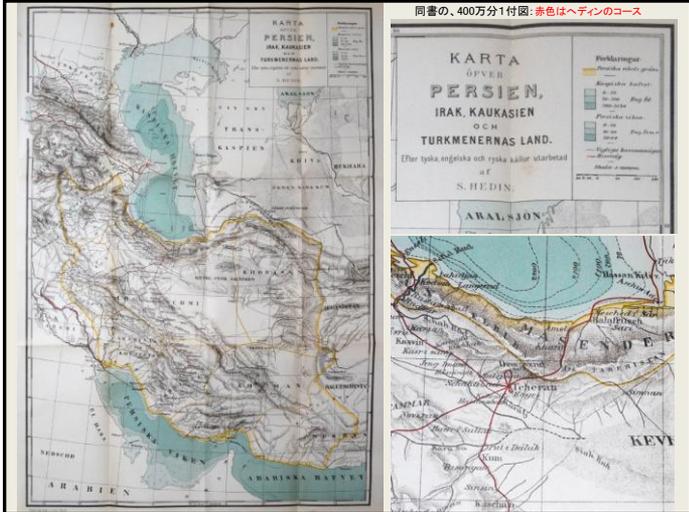
イسلام革命後はイマームモスク



Persiska skolgossar.

当時のイランの人々。左上:楽隊、右上:学校の生徒。
左:商人夫婦。

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



ベルシア湾に面したブシェールの港(現在は、原島立地で知られる。)

右上:ヨーロッパに続くイスタンブールのガラタ橋。
下は、ヘディンによる「トルコの夫人」スケッチ。
その後の著作にも、人物スケッチが多く載せられる。

Förstas turkisk dam.



『テヘランからカシュガルへ』S.ヘディン、1891。
スウェーデン王オスカル2世がベルシアに派遣した使節団の
随員(通訳として)訪問。任務の後、単独で、メルグ、フハラ、
サマルカンド、カシュガルなどを旅行(1890-91年)。
後の報告書の予報の内容。
ベルリン大学(リヒトホーフェン教授)留学の後、ハレ大学での学位
論文のもとになったのが、左の論文。(金子民雄さんによる。)

下:ヘディンの博士論文『デマバンド』
ベルシア訪問で皇帝の知遇を得、勧めによって、
デマバンド山へ。それを契機としてまどめたもの。



見開きの左に、スウェーデン国王の写真
(次スライドに。)

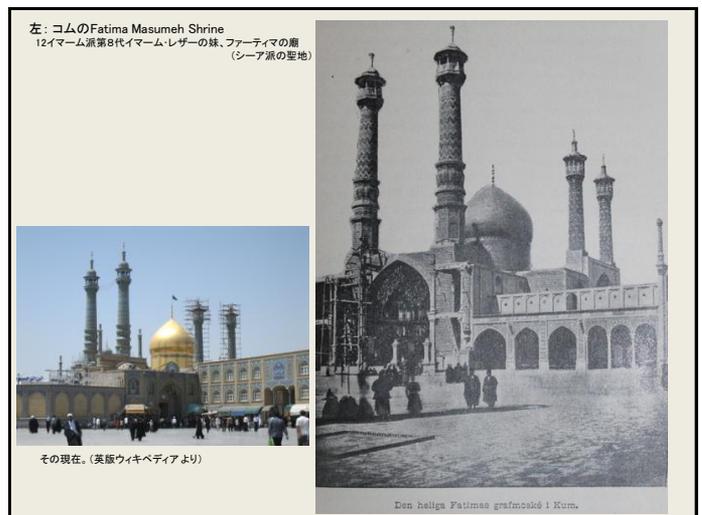
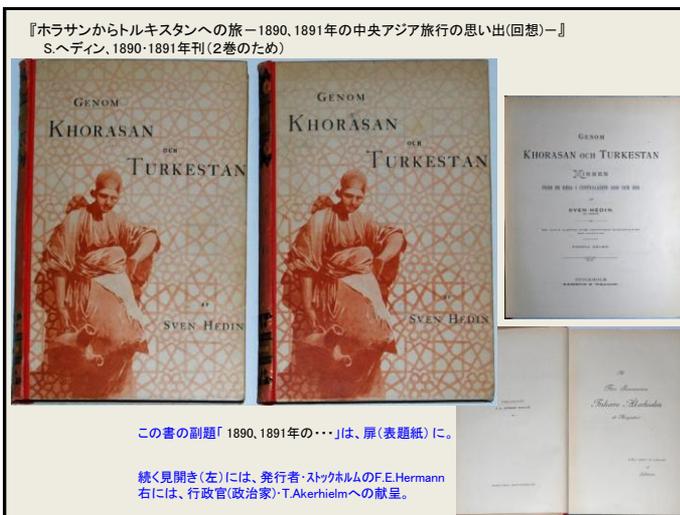
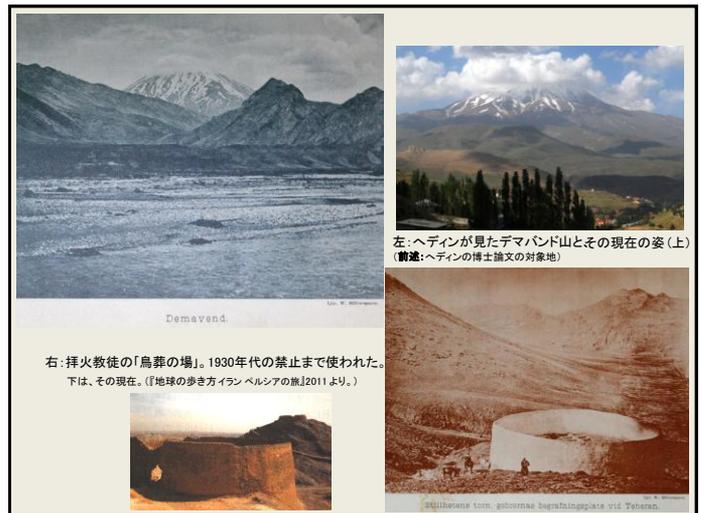
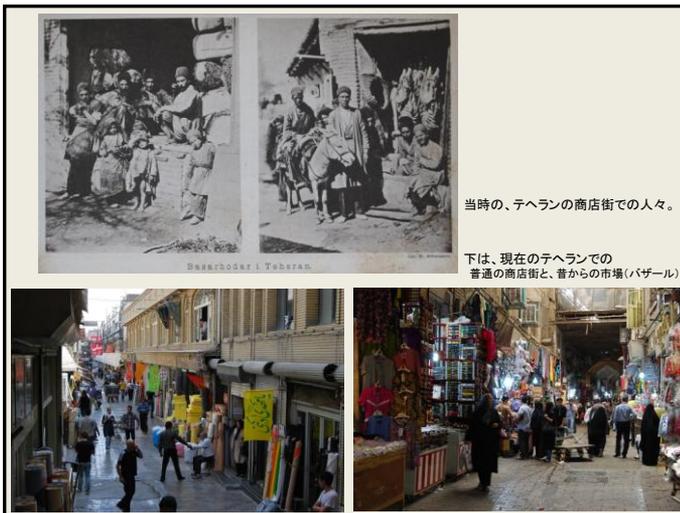


OSCAR II.
スウェーデン国王 オスカー二世

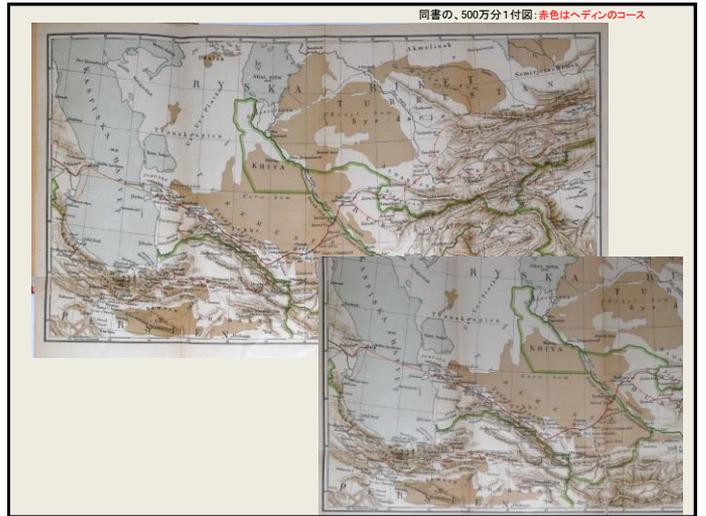
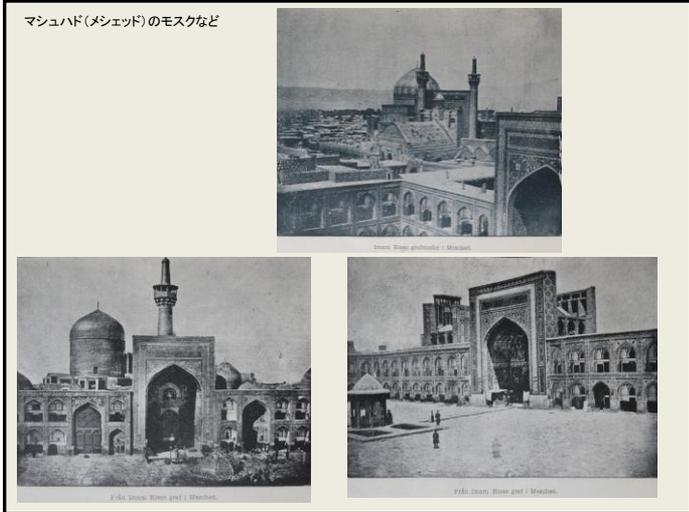
Nasr-ed-Din, sohan af Persien.
ベルシア皇帝(シャール) ナスール・エッ・ディン

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

同書より、図版の紹介



「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



『陸路インドへペルシア、セイスタン、バルチスタンを通りて—』S.ヘーデン、1910年刊
ヘーデンによる、3次探検(1906-08)の報告書 [下は、第1巻の見開き](#)

1905年ストックホルムを出発。—その年の秋に日露戦争は終わる。
旅は、ヨーロッパトルコ〜黒海〜テヘラン(こゝらで1906年)〜砂漠地帯(これはマルコ・ポーロのルート)〜ペルシアの南〜アフガンの南の端〜インドへ〜北へ。

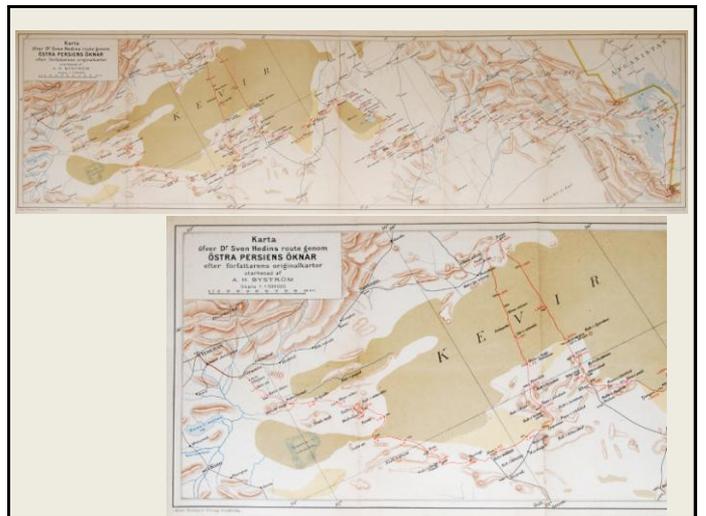
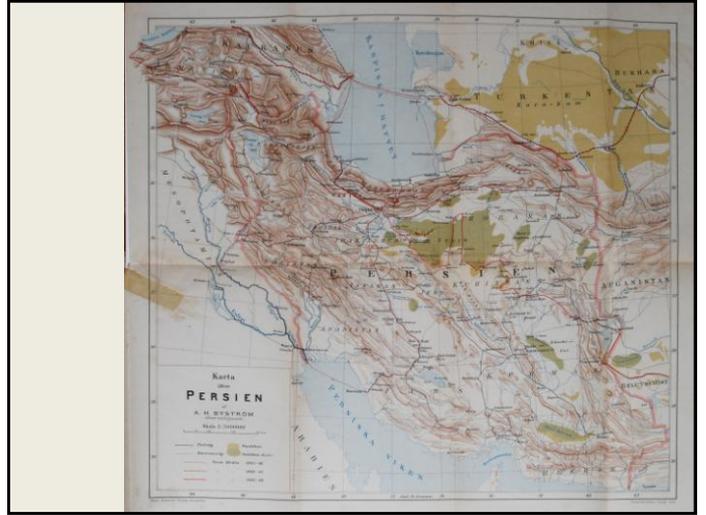
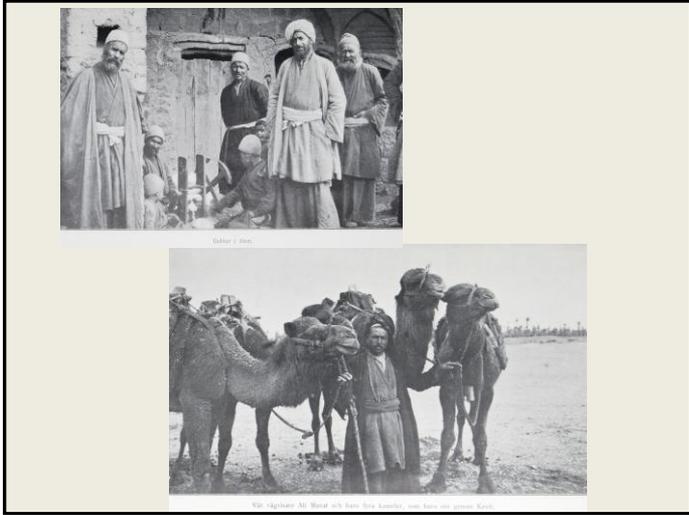
以下、第1巻所載の図版を紹介。

ペルシア人の若い女性 クルドの人たち

当時の女性の服装：現代(下写真)とは違う。

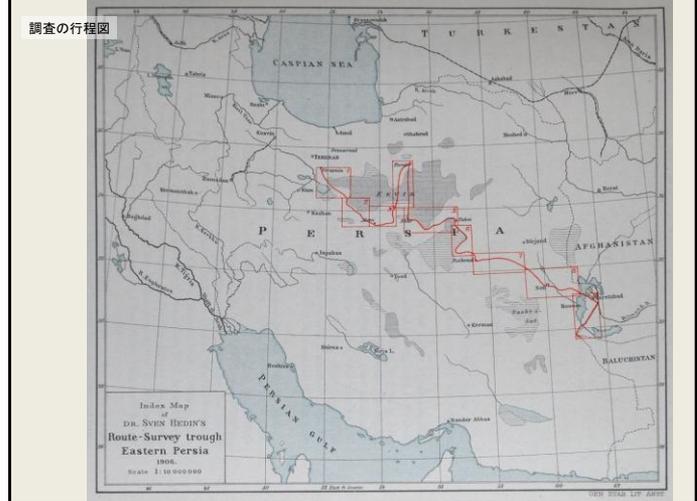
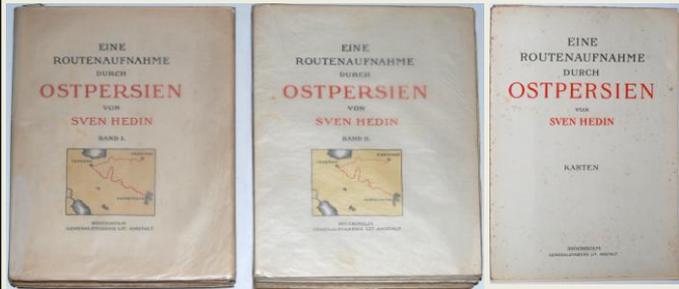
参謀本部派遣の工兵中佐・古川宣豊がスケッチしたペルシア婦人(明治24(1841)年)

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

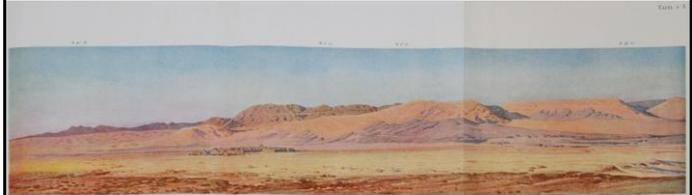
『東ペルシアの路線測量』S.ヘディン、1918・1927年刊;本文2巻と地図1冊(右)
地図に刊行年の記述はないが、たぶん、1927年(Band II)との同時出版。



前ページにあった部分図

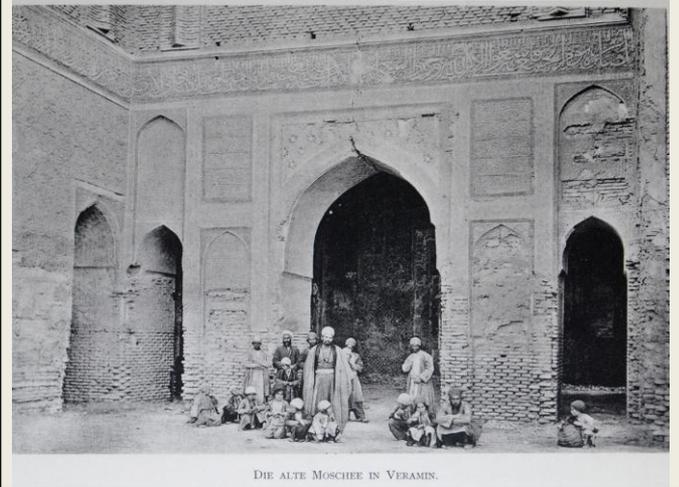


このようなパノラマ図も

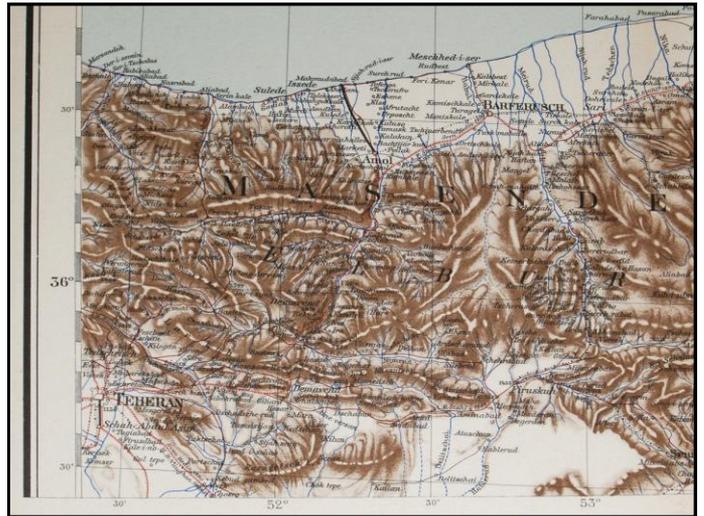
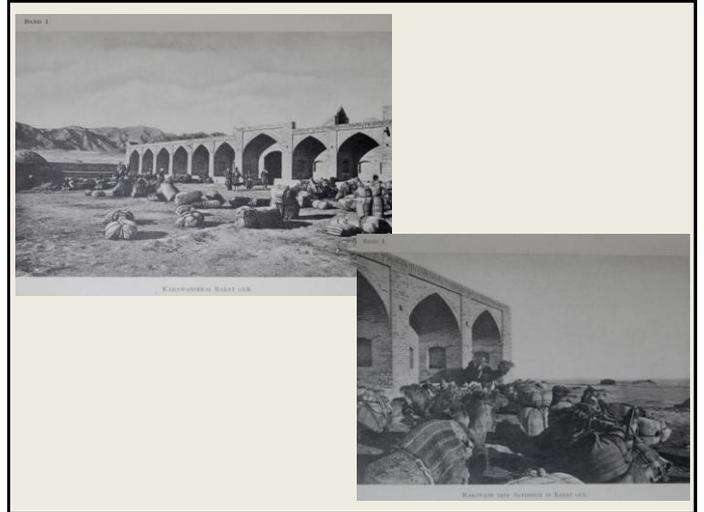


上図の部分拡大

BAND I. この書にも素晴らしい写真の数々が



「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



ペルシアにおける A. スタインの事績

サー・オーレルスタイン、1862-1943
英国(ハンガリー生まれ)の考古学者で探検家。
1900年から1916年まで、3回にわたり主にタリム盆地周辺の探検旅行と考古学的発掘。敦煌莫高窟から膨大な経典類を得たことで有名。他の探検家とは違って、インド測量局の優秀な技師を同行したので、詳しい地図を作成できた。
後年は西アジアを研究対象とする。カーブルに客死、82歳。

『西イランの古道』A.スタイン、1940年刊 十字軍時代の遺跡の発掘報告書。

金子さんコメント: ペルシア、近東に関するスタインの本は合計3冊あり、これは第1号。第3号は、戦後、未定稿のものとして出版された。

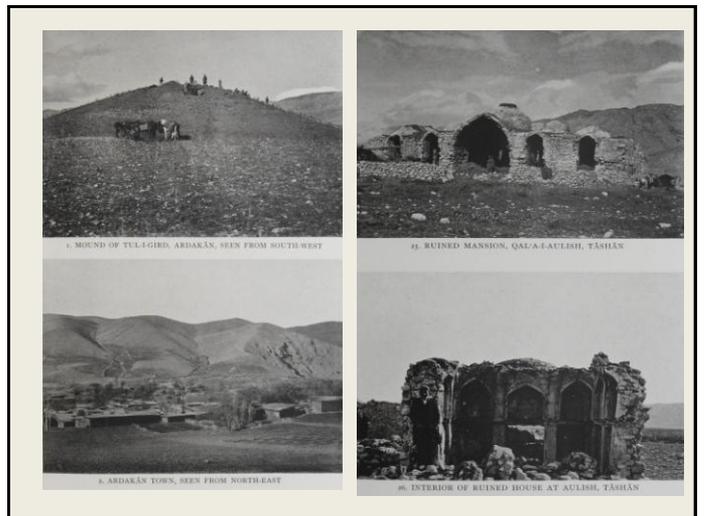
TO
SIR EDWARD D. MACLAGAN
K.C.S.I., K.C.I.E.
LATE GOVERNOR OF THE PUNJAB

THE FRIEND WHOSE SYMPATHY AND HELP
ENCOURAGED AND FURTHERED MY EFFORTS
FROM THE START OF MY INDIAN CAREER.
THIS RECORD OF EXPLORATORY TRAVEL
IS INSCRIBED
IN GRATEFUL AFFECTION

上は、同書にある**献呈の辞**
以下は、金子民雄さん訳による。

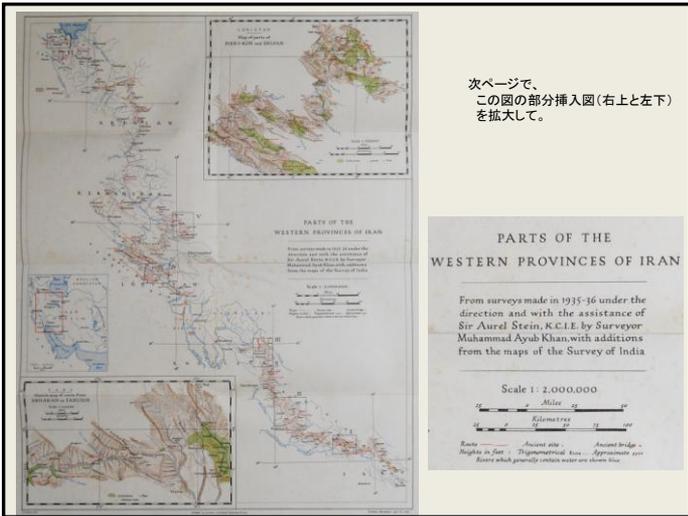
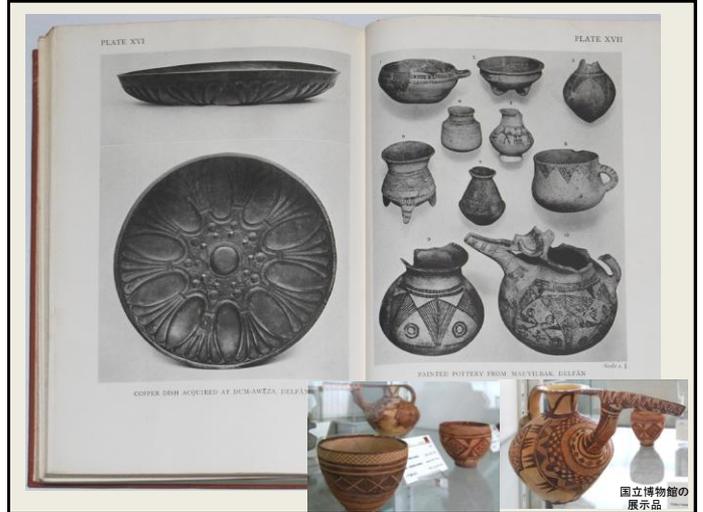
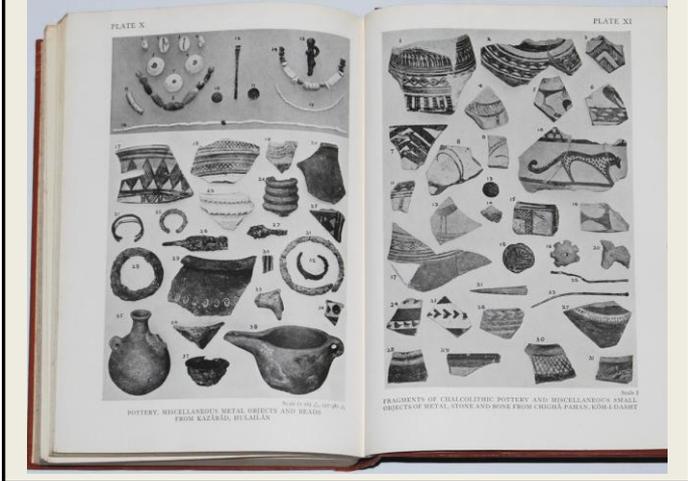
私のインドにおける人生の出発点は、私の努力を力づけ、進めて下さり、同情と援助を惜しまれなかった
前・パンジャブヤブ総督
エドワードD. マクラガン卿
K.C.S.I., K.C.I.E. に
この冒険的旅行記を、心からなる感謝の気持ちをもつて謹呈いたします。

金子さんコメント:
スタインは英国人ではなかったので、英文の表現が大変むずかしくて(複雑)、訳にくいのです。

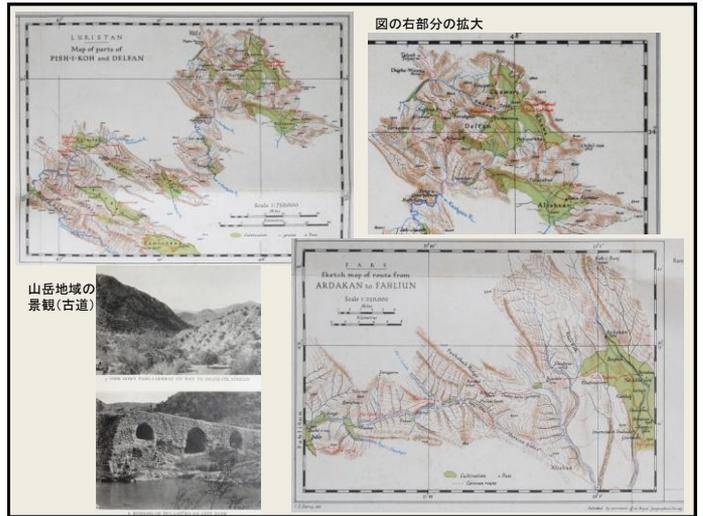


「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

スタインによる発掘品の数々



次ページで、
この図の部分挿入図(右上と左下)
を拡大して。

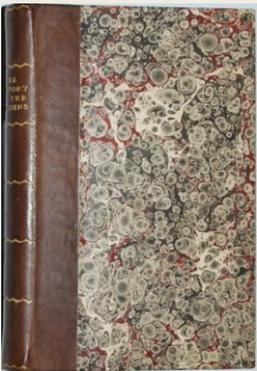


図の右部分の拡大

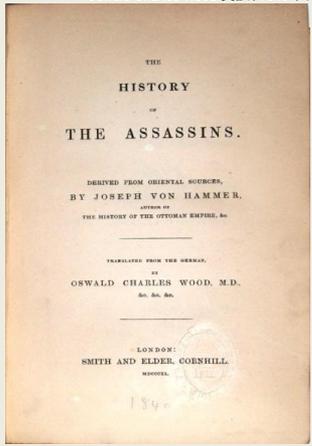
山岳地域の
景観(古道)

参考ご紹介

『暗殺者教団の歴史—東洋の伝承』 Joseph von hammer, 1818年刊：
Oswald Charles Wood 英訳、1840年刊



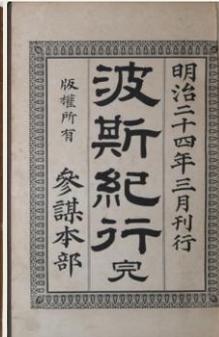
金子さんコメント: 珍しい本。綺麗な装丁だが、
初版本は多分、仮とじ本であった。



以下は、ペルシアにおける 日本陸軍の情報収集活動など:

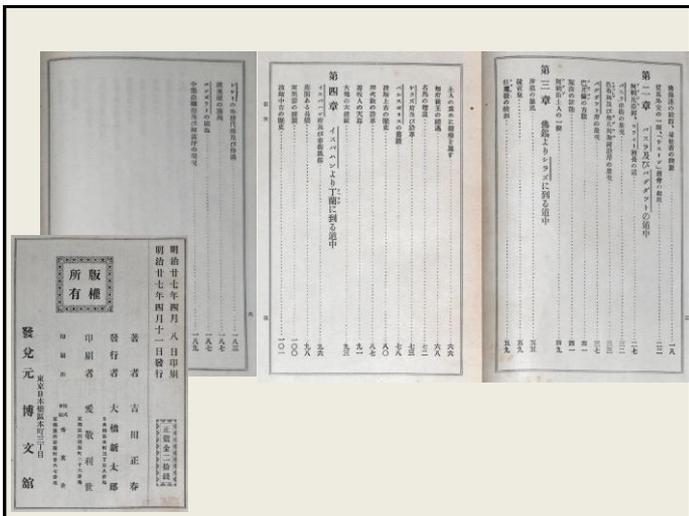
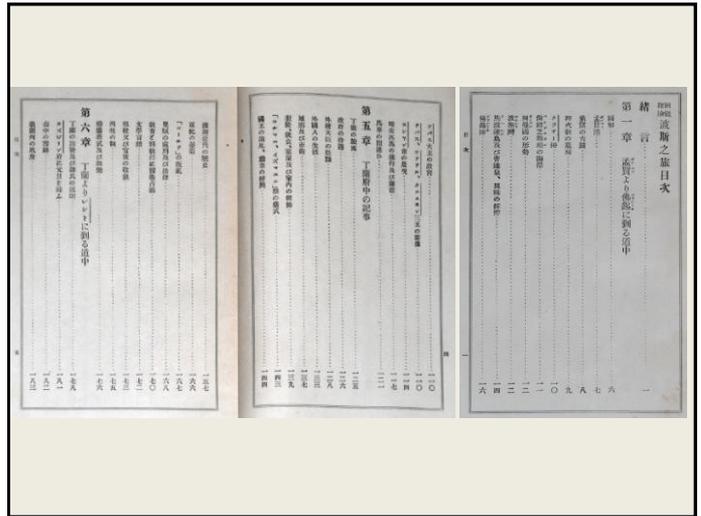
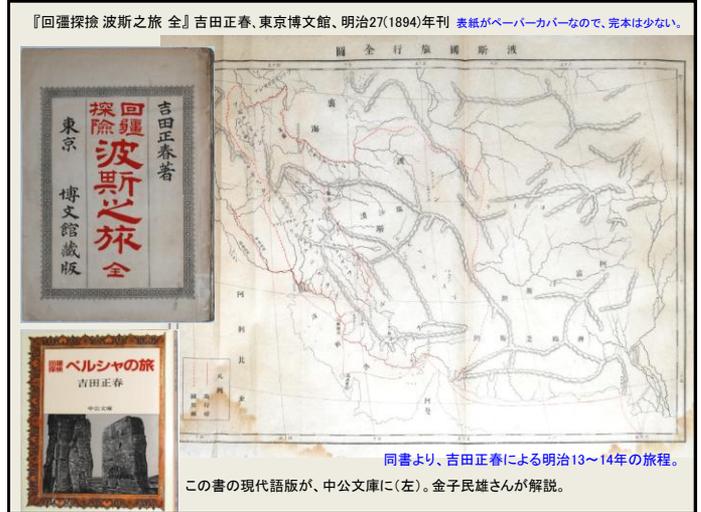
明治前期の軍は広範な情報収集

『明治廿四年 波斯紀行 完』 参謀本部、明治24(1891)年3月刊行 稀難本のため、広くは読まれていない。
内容はすぐれている。



参謀本部からペルシア(波斯)への初の派遣者、陸軍工兵中佐・古川宣馨の報告書。

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

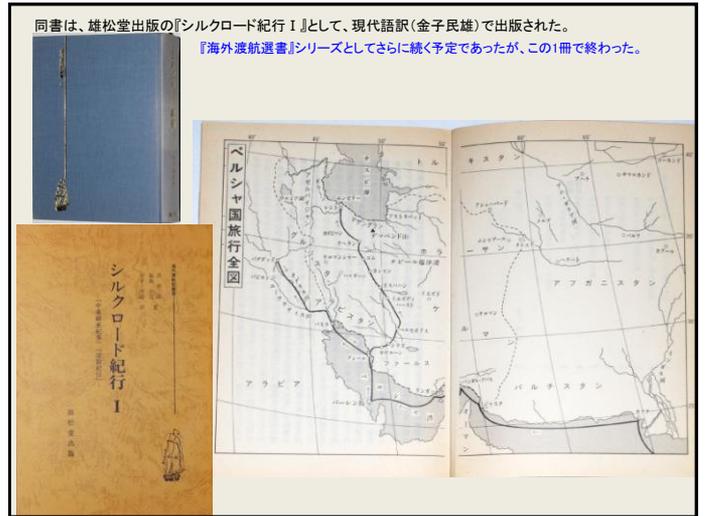
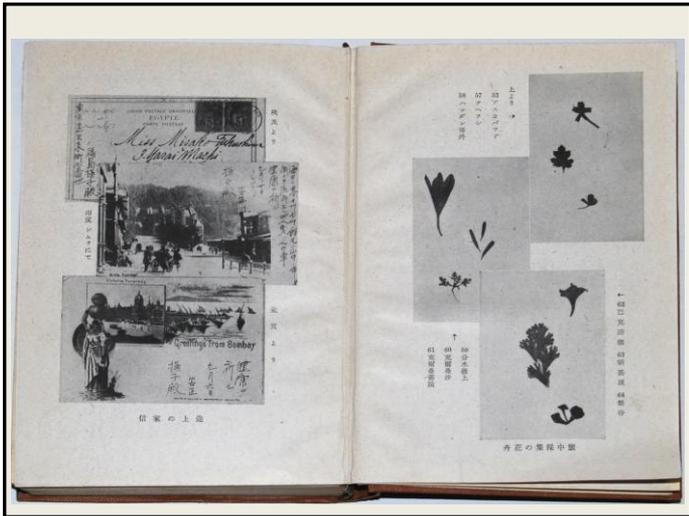
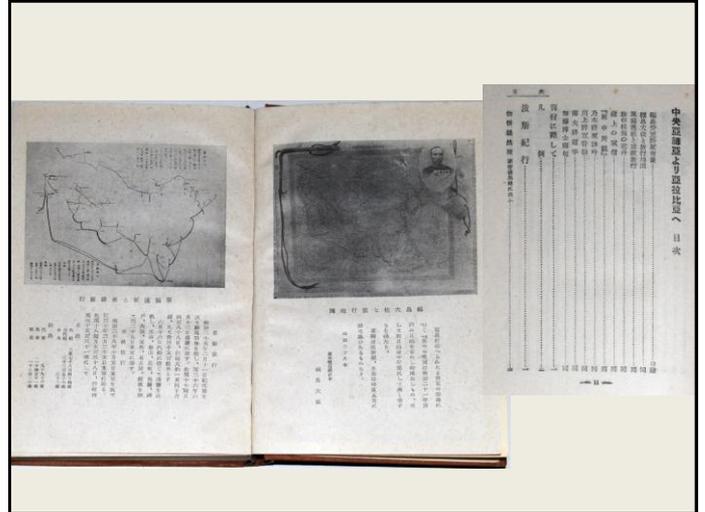


「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

『中央亜細亜より亞拉比亞へ(福島將軍遺蹟續)』福島安正(遺稿)、昭和18(1943)年刊



明治25(1892)年の「シベリア単騎横断」で名を馳せた福島安正將軍の遺稿をまとめたもの。
参謀本部の報告だったので、元本の完全稿本がない。これは、ほんの一部が発見されたもので、元本は不明。
(金子民雄さんによる。)



同書は、雄松堂出版の『シルクロード紀行 I』として、現代語訳(金子民雄)で出版された。

『海外渡航選書』シリーズとしてさらに続く予定であったが、この1冊で終わった。

『世界を家として—偉人と山水』井上雅二、東京博文館、昭和4(1929)年

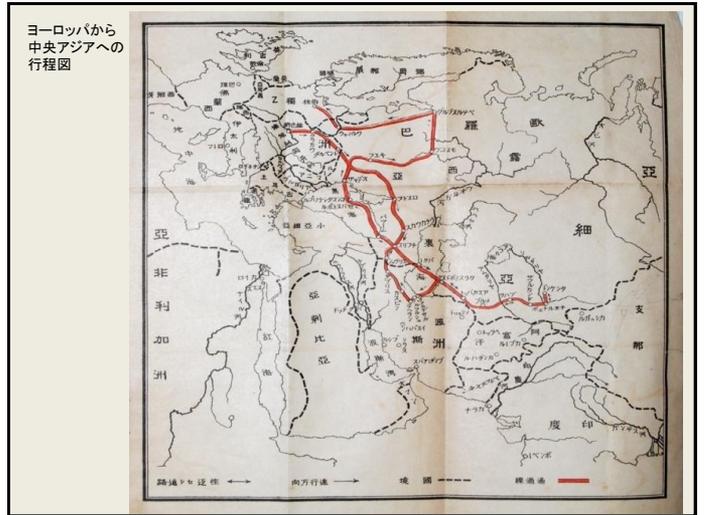
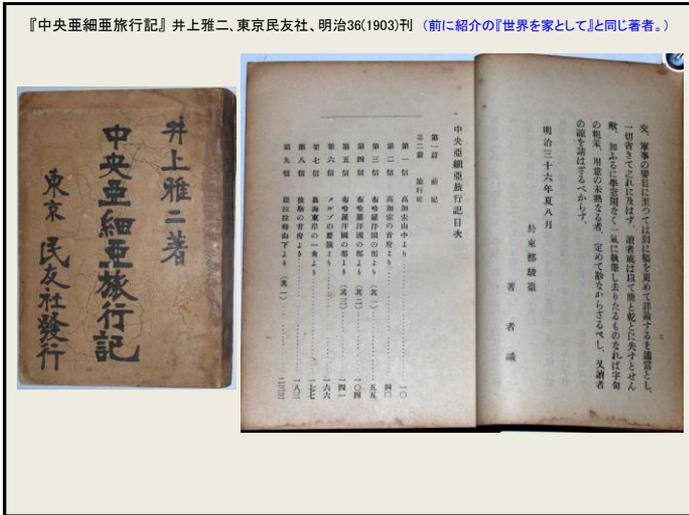
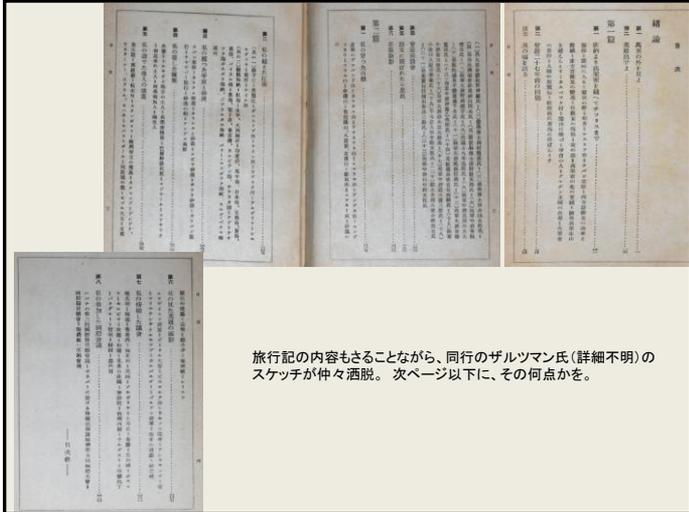


井上雅二: 1877.2.23兵庫生まれ。海軍兵学校に学び、1898.6東京専門学校英語政治科卒。1904.3通商省韓国地況調査を嘱託され、東亞同文会の一員として中国に渡る。1904.10朝鮮日新報社長。1905.9韓国政府財政顧問附財務官。1906.2水原政府財政顧問支部在勤。1906.10光州政府財政顧問支部在勤。1907.8政府財政顧問本部総務部勤務。1907.11~09.12宮内府書記官。1911.10南亞公司常務取締役。1915.1南洋協合理事。1920.11南洋協会専務理事。1924.3海外興業株式会社取締役社長。1924.5衆議院議員。1926.6秘露綿花株式会社社長。1947.6.23死去。
(以上、国立国会図書館「リサーチナビ」による。)

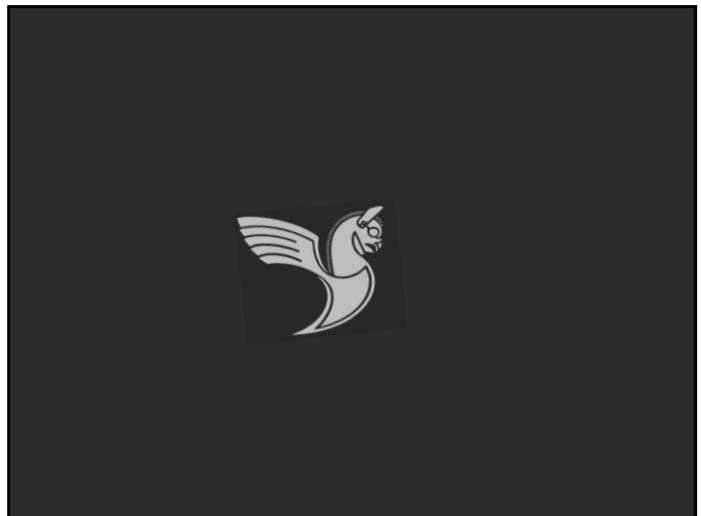
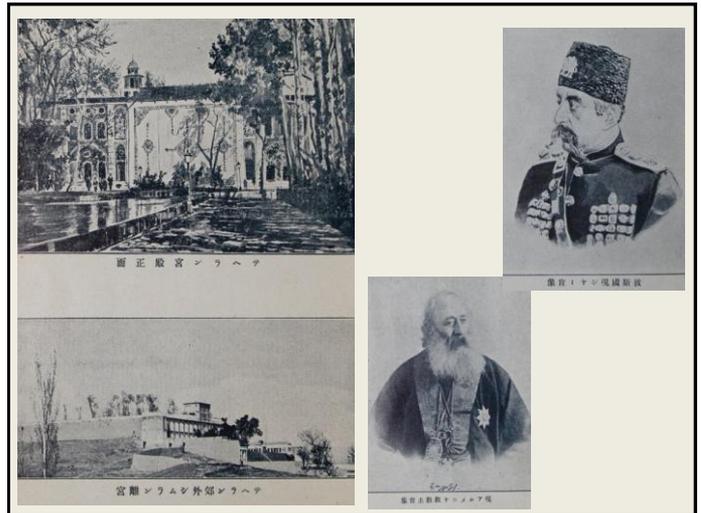
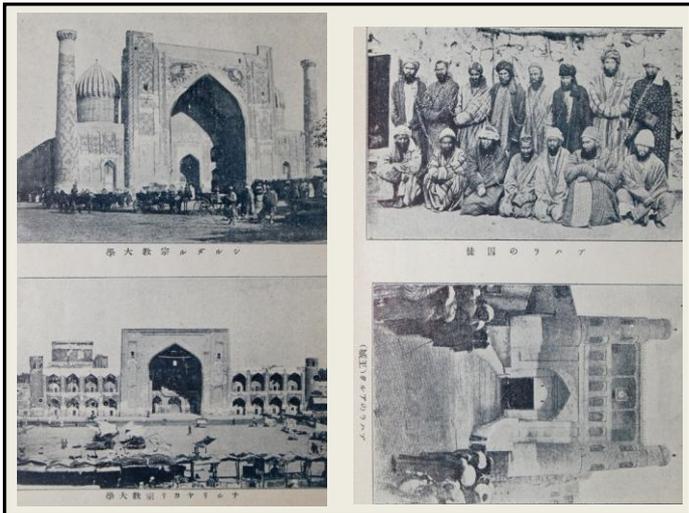


井上の旅行には、当時、参謀本部附陸軍中尉であった、オーストリア国軍人ホフリヒターが同行した。
上は、この書の出版時(1929年)に同国の陸軍大佐となっていた氏が巻頭に寄せた文。

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

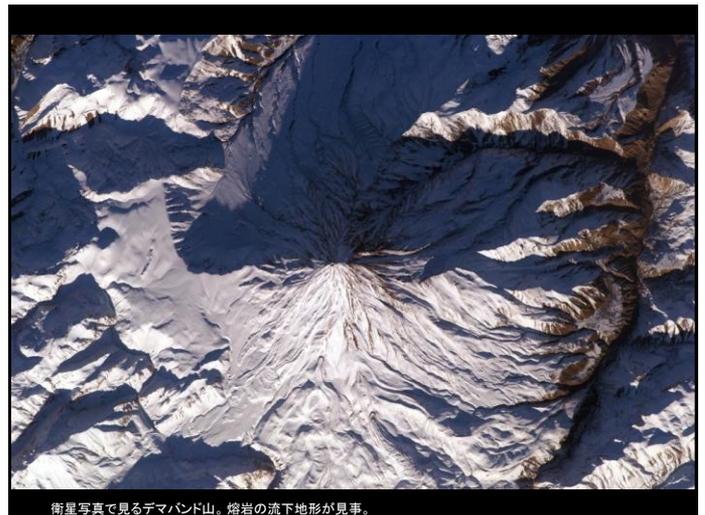


「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史とその地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



「イランの現況と、自然・遺跡・人々」地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」

③ イランの自然と、デマバンド山 (Mt.Damavand、公称5671m) 登頂

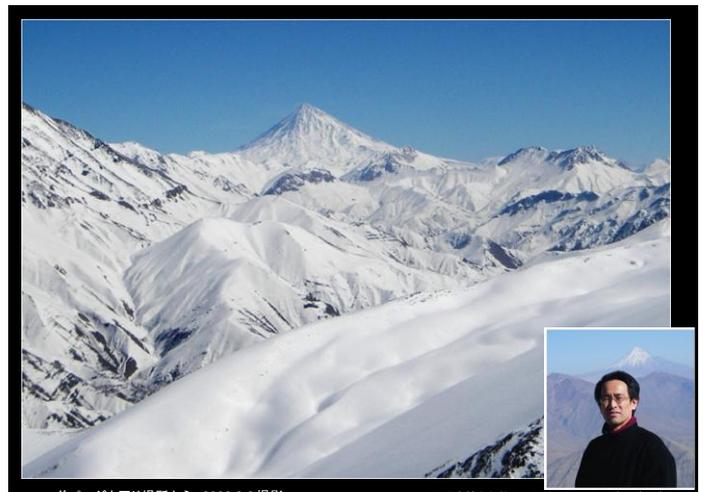


衛星写真で見るデマバンド山。熔岩の流下地形が見事。

デマバンド山の遠望



ディジン・スキー場の最上部から、デマバンド山遠望。(前田浩之さん、2007.3.8撮影)

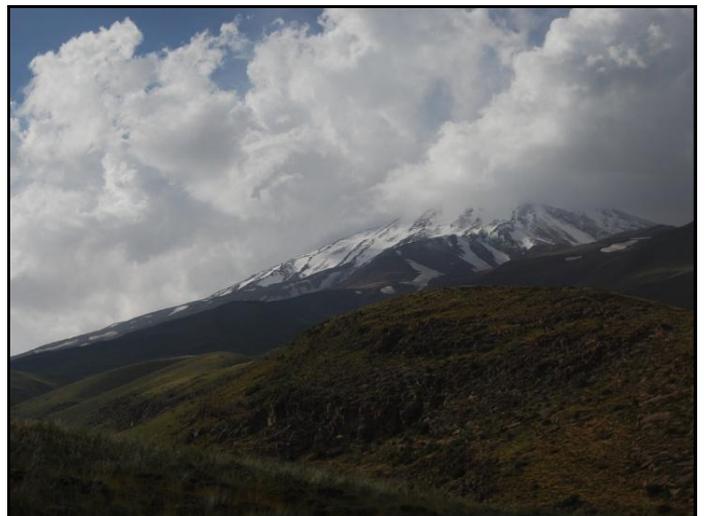


前ページと同じ場所から、2008.3.6撮影。(現地事情をお教えいただいた、AOKI 前田浩之さん、2008.11、トーチカ山頂上にて。)

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」





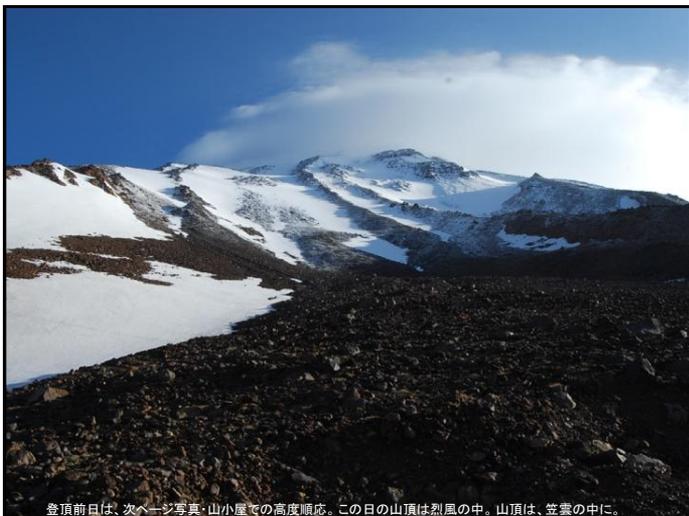




登山基地になる町、レイネ、小さなホテル着。







登頂前日は、次ページ写真・山小屋での高度順応。この日の山頂は烈風の中。山頂は、笠雲の中に。



山中で唯一の小屋(約4000m)。



自炊小屋のため、同行ガイドさんによる調理。



できあがった夕食。



2人で度山の、これからコンソを出して自炊の準備。



一人で登山の



早朝の「影デマバンド」



デマバンド山(公称 5671m)山頂直下。紹介する中では、小生(長岡)の唯一の写真。
5000mを越えれば、夏でも氷雪と烈風の世界。







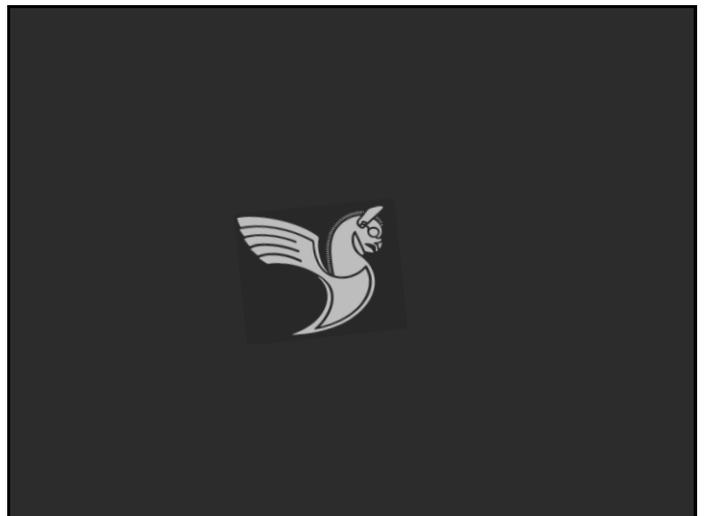
全部が、イランの人たち。素晴らしい装備品。



イランの学生さん達。皆さん、なかなか快活な。







附 イランの工芸品など各種





高価な絨毯ではなく、プリント柄の夏紗も。



伝統の金属細工。



バザールでは、金工・手芸装飾品を中心に、その製作者が店主であることが多い。



こちらのお店でも、
販売品のデザインなどは、もっぱら自分たちで。



伝統の七宝焼き。

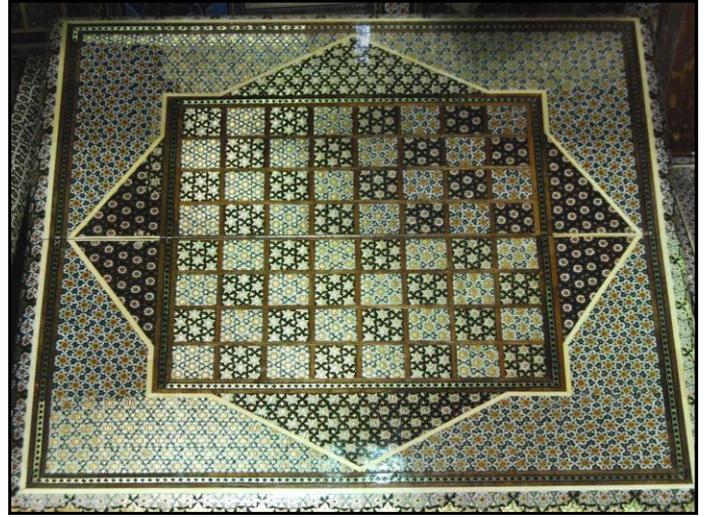


伝統の、魔除けの「目玉」模様は、至る所に。



素晴らしいガラス細工の数かず。





以下、伝統の細密画と書

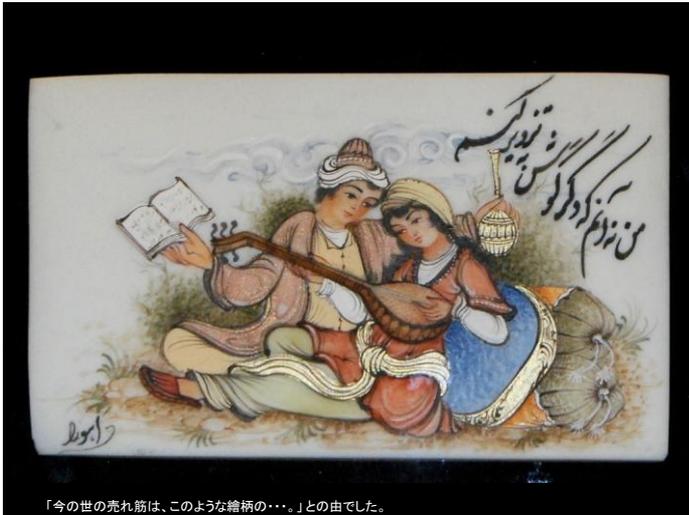


以下、5ページ目までの制作画家で、お店の主人。



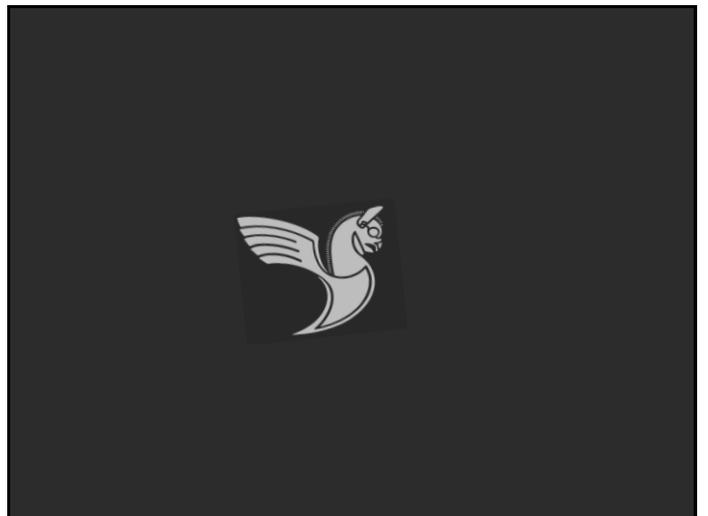
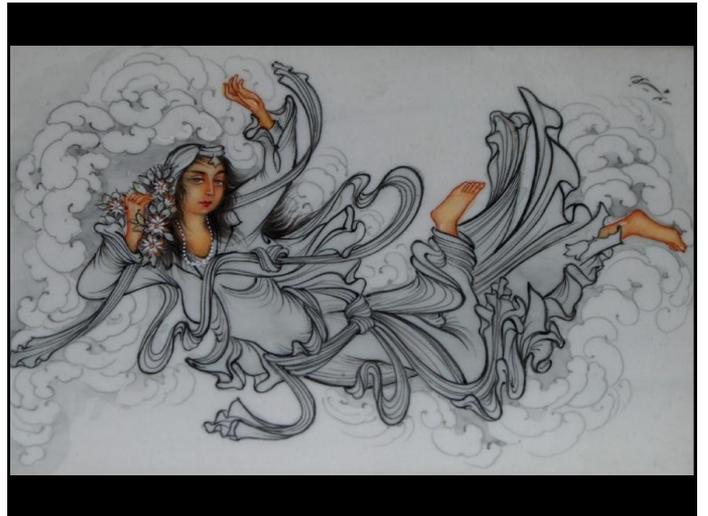

MINIATURIST
 OKEYAT POUR BASSOU
 PRODUCER OF THE BEST MINIATURE
 IRAN SQUARE SPANAN IRAN CREATION ART BAZAAR
 NEXT TO ALQAPU PALACE NO. 83
 TEL : 2228328 FAX : 8146834636

その場で、さらさらと
 名刺裏に描いて買った絵。
 右は、伝統的な繪柄だが、...

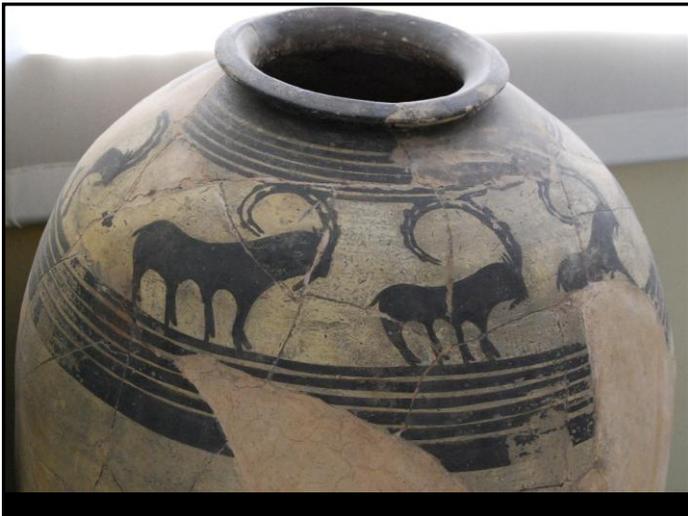



「今の世の売れ筋は、このような繪柄の・・・」との由でした。





附 国立考古学博物館の展示より



ペルセポリスの「百柱の間」を構成していた柱の一つ。上部まで完全なものは稀少。



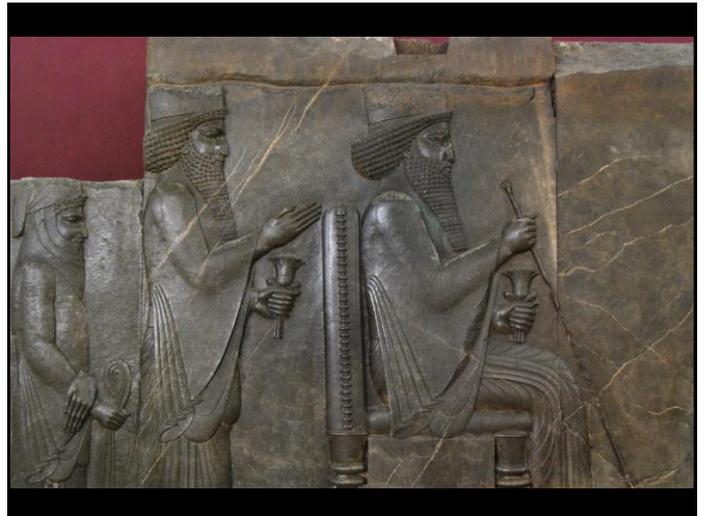
出土したガラス製品の状態。



今のイランにあるものは、出土品のために、このような。

正倉院蔵の、同じ製品。(前出。)





お聴き頂き ありがとうございます



素晴らしいイランの地にて、皆様にお目にかかれそうですよに

ご質問は 次へ : nagaoka@almond.ocn.ne.jp

(イスファハーン、王の広場廻廊にて:長岡, 2012.7撮影)

「イランの現況と、自然・遺跡・人々・地図史料—附:19世紀の史料に見る踏査小史と
その地政学的位置。最高峰デマバンド山(5671m)登頂の写真紹介」



今回のご紹介に際して、次の各位・機関から、
ご教示と、史料の利用等の便宜を頂きました。

(五十音順・敬称略)

牛木 久雄
金子 民雄
中沢 伴行 (西遊旅行(株))
西遊旅行(株)
イランでのガイド、レザさん ほか
山岳ガイド、ザレイさん
イランで出逢った 多くの人々
イラン 国立考古学博物館 ほかの 博物館
インターネット上の ウィキペディア ほか

(イスファハーンのスィー・オ・セ橋:長岡,2012.7撮影)